

聖山式土器文化圏の葬墓制

関根 達人*

Tatsuhito Sekine*

- | | |
|---------------|-------|
| 1. 問題の所在と研究目的 | 4. 考察 |
| 2. 研究対象と研究方法 | 5. 結語 |
| 3. 事例の検討 | |

要旨

北海道では縄文後期後葉から末葉にかけ、道央部を中心に道北内陸部、道東オホツク海沿岸域で周堤墓が営まれておらず、その背景に後期後半の縄文社会の複雑化が指摘されている。後期末葉の御殿山式期から晩期初頭には道内各所でマウンドや配石を伴う土坑墓が出現する。晩期中葉から後葉、石狩低地帯から津軽北部・下北地方にかけてみられる聖山式土器文化圏（北部亀ヶ岡文化圏）では、粘土や砂利のマウンドを伴う土坑墓が分布している。本稿では、聖山式土器文化圏の社会像を探るため、墓域のあり方、墓の構造、供献・副葬品を検討した。

墓域は居住域から離れており、両者が隣接・重複することはほとんどないが、墓域に隣接ないし一部重なる形で、葬送儀礼に関連する配石遺構が設けられる場合がある。成人と子どもが同じ墓域に埋葬されていることや、墓域が複数に分かれている場合、それぞれに成人男女と子どもが含まれるとみられることから、墓域は世帯を単位として営まれていた可能性が高い。

聖山式土器文化圏の墓を特徴づけている粘土や砂利を用いたマウンドを伴う土坑墓は、津軽海峡に面する地域で晩期前葉に始まり、晩期中葉に増加し、聖山式文化圏内に広がったことが明らかとなった。副葬品とマウンド・槨棺・ベンガラの有無との間に特に相関性は見られないことから、マウンド・槨棺・ベンガラは被葬者の年齢・性別・階層とは関係しない可能性が高い。

聖山式土器文化圏の墓を特徴づけている副葬品に石製・土製の玉類、土製耳飾り、漆塗りの装身具、複数のサメの歯を用いた装身具など多種多様なアクセサリー類がある。これらアクセサリーの副葬に関しては、どの遺跡でも同じ墓域内で極端な差が認められる。本稿ではそのなかで特に多くの装身具を伴う乳幼児墓に注目した。乳児が身につけたとは思われない耳飾りなどが含まれていることから、それらは、子どもの親の所持品で、亡き子どものために副葬したと考えた。

聖山式土器文化圏には、豊富な装身具を持つ者と持たぬ者とがあり、持つ者はそれを子どもに継承したが、墓域や墓の構造には著しい階層差が見られない社会だったといえよう。

キーワード

- 対象時代 縄文時代
- 対象地域 北海道・青森
- 研究対象 土坑墓・副葬品

* 弘前大学 人文社会科学部 教授

1. 問題の所在と研究目的

2021年、北海道・北東北の縄文遺跡群が世界文化遺産リストに記載された。構成資産17遺跡のうち4遺跡が縄文晩期の亀ヶ岡文化に属する。亀ヶ岡文化圏は北緯38度から42度付近まで南北に長く、北は北海道南部から南は福島県に及ぶ。晩期中葉には亀ヶ岡文化圏が北へ拡大した結果、大洞C2式新段階以降は、津軽海峡を跨いで石狩低地帯から津軽北部・下北地方にかけて聖山式土器文化圏（北部亀ヶ岡文化圏）が形成された。そして聖山式土器文化を最後に晩期末葉には本州と北海道との一体性が失われる。

亀ヶ岡文化の墓は地面に穴を掘って遺体を埋葬した土坑墓を中心とし、「共同墓地」では楕円形墓、「個家別墓地」では円形墓や貯蔵穴転用墓が多く、子供用とみられる土器棺墓は拠点集落に限られることが指摘されている（金子2005b）。そして亀ヶ岡文化圏では、北部を中心に晩期前葉から中葉にかけ、集落とは別の場所に大規模な集団墓地が営まれており、このうち青森市朝日山遺跡（青森県埋蔵文化財調査センター1994、中嶋2007）や秋田市地方遺跡（秋田市教育委員会1987）などで確認されている数百基の土坑墓からなる「大規模共同墓地」は複数の集落によって営まれた可能性がある。

亀ヶ岡文化の墓は縄文時代の墓のなかでは比較的副葬品が豊富である。亀ヶ岡文化圏では副葬品を持つ墓と持たない墓の差が明確な上、副葬品を伴う子供の墓が多くみられることから、世襲制により固定化された階層化社会を想定する意見がある（中村1999）。これに対し、筆者は、①副葬品の多くを占める玉類や耳飾り、漆塗り櫛などはいわゆる死装束を含め、死者が身に着けていたものであり、他には死者への供え物をいれたと考えられる土器や石鏃・石斧などの利器が僅かにみられるに過ぎない、②亀ヶ岡文化の墓の副葬品には、古墳に納められる石製模造品のように、初めから墓に副葬するために作られたもの（明器）は見当たらない、③古墳に副葬される玉・鏡・剣のような威信財と呼べるものも、石刀やサメの歯を用いたアクセサリーなどがごく稀にみられるに過ぎず、ヒスイ製玉類を除けば特に決まったものが存在するわけではない点

を挙げ、副葬品を伴う子供の墓を過大評価し、副葬品の多寡をもって階層化の証拠とするのは、やや性急に過ぎはしないだろうかと指摘したことがある（関根2015）。

ところで、亀ヶ岡文化の土坑墓のなかには盛土を伴う例があることが青森県つがる市亀ヶ岡遺跡（青森県立郷土館1984）や秋田県由利本荘市湯出野遺跡（秋田県教育庁文化課1978）などで確認されていたが、これまで特段注目されることはなかった。しかし近年、津軽半島西海岸の十三湖北岸にある五月女泡遺跡で縄文後期後葉から晩期中葉の大規模な環状土坑墓群が発見され、多くの土坑墓に小規模な墳丘（マウンド）が伴うことが判明した（五所川原市教育委員会2017）。また亀ヶ岡遺跡でも史跡整備に伴う発掘調査でマウンドを伴う土坑墓群が環状に巡る可能性が高いことが判明した（つがる市教育委員会2019）。五月女泡遺跡では、砂地に掘られた土坑墓の上に黄色粘土が盛られているためマウンドを容易に確認できた。加えてマウンドが遺物包含層や厚い飛砂層によって保護され良好な状態にあった。通常の遺跡では土坑墓の埋土と盛土の識別が難しいため見逃されてきただけで、亀ヶ岡文化期にはマウンドを伴う土坑墓はそう珍しいものではなかった可能性がある。マウンドも持つ墓は、亀ヶ岡文化のひいては縄文時代の墓地景観を考える上で重要な発見といえる。

一方、北海道では縄文後期後葉の堂林式期から末葉の御殿山式期にかけ、道央部を中心に、道北内陸部、道東オホツク海沿岸域で、埋葬区画・墓標・顔料・副葬品などに差が見られる複数の墓からなる周堤墓が営まれた。周堤墓を対象とした研究は多く、導き出される社会像も様々だが、周堤墓が営まれた背景に、後期後半の社会の複雑化があることに関しては意見が一致している。道央部の千歳市美々4遺跡や恵庭市の柏木B遺跡では、堂林式に後続する三ツ谷式期、周堤墓と一部併存・後続して、周堤墓の要素を受け継ぐ「単独埋葬区画墓」（瀬川2007）が営まれた。そして後期末葉の御殿山式期から晩期初頭には道内各所でマウンドや配石を伴う土坑墓が出現する。そして北海道では墓制の変遷に基づき、縄文晩期から続縄文にかけ首長

者の質的变化が指摘されている（青野 1999、瀬川 2007、藤原 2019a・2023ab）。

このように東北地方・北海道とともに縄文晚期の多様化した墓に関する関心は高く、多くの先行研究が存在するが、両地域を横断する墓制研究は意外に少ない。

松前町上川遺跡では 1976 年の松前町教育委員会による調査（久保 1997）と 2019 年の弘前大学による調査（関根 2021）で、縄文晚期中葉の大洞 C2 式古段階から聖山 I・II 式とそれに後続する大洞 A2 式併行期（大平段階）のマウンドや配石を有する土坑墓からなる墓域が確認され、マウンド上からは供献土器、墓坑内からは玉類・石鏃・土器・漆製品などが出土した。同様の墓制は、津軽海峡沿岸部の縄文晚期中葉～後葉の聖山式土器文化圏に認められる。

冒頭で述べたように晩期末葉には本州と北海道との一体性が失われ、その後、北海道は本州と異なる歴史を歩むようになる。すなわち聖山式土器が分布する津軽海峡周辺域（道南から下北半島・津軽半島北部）は、その後、津軽平野まで北上する弥生文化圏と隣接するも、稻作を受容することなく狩猟・漁撈・採集を中心とする続縄文文化圏の南端となる。

恵山文化の母体となる聖山式土器文化の墓制はどういうに形成されたのであろうか。聖山式土器文化はどのような社会から生まれたのだろうか。そこに弥生と続縄文の社会の違いを紐解く鍵があるようと思える。

本稿では、本州北部から北海道南部を範囲とする聖山式土器文化圏の墓制について、墓域のあり方、墓の構造、供献・副葬品を検討し、墓を営んだ人々の社会について考察する。

2. 研究対象と研究方法

津軽海峡周辺域（松前半島・亀田半島・下北半島・津軽半島北端部）で確認されている縄文晚期の遺跡は 264 箇所に及ぶ（図 1・表 1）。このうち、北海道側では、松前町上川遺跡（19）、木古内町札苅遺跡（52）・大平遺跡（54）・大釜谷 3 遺跡（68）、本州側では五所川原市五月女蕪遺跡（253）でマウンドを伴う土坑墓が確認されている。

本稿では、聖山式土器文化圏内で晩期中葉から後葉

の集団墓地が確認されている遺跡のなかから、白老町社台 1 遺跡、洞爺湖町高砂貝塚、木古内町大釜谷 3 遺跡・札苅遺跡、五所川原市五月女蕪遺跡の 5 遺跡を選び、墓の分布、墓の構造、墓に伴う遺物について分析・検討した。このうち墓の構造については、配石・マウンドなどの上部施設、墓坑の大きさ（長軸・短軸）、赤色顔料や墓坑底の溝の有無について検討した。

墓に伴う遺物については、出土位置を墓坑上、埋土中、墓坑底面に大別した。墓坑底面の遺物が、被葬者が身につけていた装身具類（死装束を含む）や副葬品であるのに対して、埋土中から出土した遺物は埋葬時に行われた葬送儀礼で用いられたものと周囲の土からの混入品の両者が含まれるが、その区別は難しく、ある程度恣意的にならざるを得ない。また墓坑上の遺物には、墓が営まれた際に墓の存在を明示する目的で置かれたものと、墓に供献されたものが含まれる。例えば土器の場合、土坑の上に敷かれた破片は墓印であり、土器は埋葬施設の一部と見做した。



図 1 津軽海峡周辺の縄文晩期の遺跡

表1-1 津軽海峡周辺の縄文晩期の遺跡(1)

No.	遺跡名	所在地	No.	遺跡名	所在地
1	上ノ国遺跡	北海道上ノ国町字上ノ国	84	亀尾A遺跡	北海道函館市亀尾町
2	金堀沢遺跡	北海道上ノ国町字石崎	85	石倉貝塚	北海道函館市石倉町
3	木ノ子遺跡	北海道上ノ国町字木ノ子	86	西桔梗N-3遺跡	北海道函館市西桔梗町
4	大安在遺跡	北海道上ノ国町字小安在	87	西桔梗N-5遺跡	北海道函館市西桔梗町
5	赤石遺跡	北海道上ノ国町字大崎	88	西桔梗D遺跡	北海道函館市西桔梗町
6	四十九里沢A遺跡	北海道上ノ国町字勝山	89	西桔梗E1遺跡	北海道函館市西桔梗町
7	北村遺跡	北海道上ノ国町字北村	90	西桔梗E2遺跡	北海道函館市西桔梗町
8	新村1遺跡	北海道上ノ国町字大留	91	日吉町I遺跡	北海道函館市日吉町
9	愛宕山遺跡	北海道上ノ国町字桂岡	92	桔梗4遺跡	北海道函館市桔梗町
10	桂岡遺跡	北海道上ノ国町字桂岡	93	東山F遺跡	北海道函館市陣川町
11	ワラビ岱遺跡	北海道上ノ国町字桂岡	94	陣川町遺跡	北海道函館市陣川町
12	早瀬遺跡	北海道上ノ国町字早瀬	95	鰐川4遺跡	北海道函館市鰐川町
13	羽根差遺跡	北海道上ノ国町字羽根差	96	旭岡1遺跡	北海道函館市旭岡町
14	相泊墓地遺跡	北海道上ノ国町字小砂子	97	亀尾1遺跡	北海道函館市亀尾町・旭岡町
15	大岱遺跡	北海道上ノ国町字勝山	98	西桔梗1遺跡	北海道函館市西桔梗町
16	宮の沢遺跡	北海道上ノ国町字勝山	99	豊原4遺跡	北海道函館市豊原町
17	新村2遺跡	北海道上ノ国町字豊田	100	浜町B遺跡	北海道函館市浜町
18	新村4遺跡	北海道上ノ国町字豊田	101	戸井貝塚	北海道函館市浜町
19	上川遺跡	北海道松前町字上川・字朝日	102	釜谷町1遺跡	北海道函館市釜谷町
20	大尽内遺跡	北海道松前町字館浜	103	高屋敷川2遺跡	北海道函館市小安町
21	札前第2地点遺跡	北海道松前町字札前	104	姥子川2遺跡	北海道函館市浜町
22	赤神神社遺跡	北海道松前町字赤神	105	釜谷町3遺跡	北海道函館市釜谷町
23	静浦A遺跡	北海道松前町字静浦	106	川上遺跡	北海道函館市川上町
24	小浜遺跡	北海道松前町字小浜	107	日の浜砂丘3遺跡	北海道函館市日ノ浜町
25	高野遺跡	北海道松前町字高野	108	高岱3遺跡	北海道函館市高岱町
26	大津遺跡	北海道松前町字大津・字江良	109	高岱4遺跡	北海道函館市高岱町
27	白坂遺跡	北海道松前町字白坂	110	日の浜遺跡	北海道函館市高岱町
28	上川B遺跡	北海道松前町字上川	111	古武井3遺跡	北海道函館市日ノ浜町
29	江良A遺跡	北海道松前町字江良	112	古武井4遺跡	北海道函館市日ノ浜町
30	茂草D遺跡	北海道松前町字茂草	113	古武井9遺跡	北海道函館市高岱町
31	トッテ3C遺跡	北海道松前町字札前	114	サルカイ4遺跡	北海道函館市島泊町
32	小戸長遺跡	北海道松前町字札前	115	榎法華遺跡	北海道函館市新八幡町
33	建石D遺跡	北海道松前町字建石	116	大龍寺遺跡	北海道函館市島泊町
34	大磯B遺跡	北海道松前町字大磯	117	サルカイ2遺跡	北海道函館市富浦町
35	札前第3地点遺跡	北海道松前町字札前	118	絵紙山2遺跡	北海道函館市絵紙山町
36	清部E遺跡	北海道松前町字清部	119	黒鷲A遺跡	北海道函館市尾札部町
37	館崎遺跡	北海道福島町字館崎	120	磨光A遺跡	北海道函館市尾札部町
38	館古遺跡	北海道福島町福島	121	川汲A遺跡	北海道函館市川汲町
39	吉岡遺跡	北海道福島町字吉岡	122	ハマナス野遺跡	北海道函館市川汲町
40	吉野墓地遺跡	北海道福島町字吉野	123	大船A遺跡	北海道函館市大船町
41	村中遺跡	北海道知内町字元町	124	豊崎M遺跡	北海道函館市豊崎町
42	荒神神社遺跡	北海道知内町字元町	125	豊崎E遺跡	北海道函館市豊崎町
43	湯の里1遺跡	北海道知内町字湯の里	126	安浦C遺跡	北海道函館市安浦町
44	サンナン遺跡	北海道知内町字中の川	127	安浦B遺跡	北海道函館市安浦町
45	湯の里3遺跡	北海道知内町字湯の里	128	竜王寺遺跡	北海道函館市川汲町
46	湯の里4遺跡	北海道知内町字湯の里	129	木直C遺跡	北海道函館市木直町
47	湯の里5遺跡	北海道知内町字湯の里	130	見日B遺跡	北海道函館市尾札部町
48	湯の里6遺跡	北海道知内町字湯の里	131	大船遺跡	北海道函館市大船町
49	森越3遺跡	北海道知内町字森越	132	大船E遺跡	北海道函館市大船町
50	中の川2遺跡	北海道知内町字中の川	133	大船D遺跡	北海道函館市大船町
51	大学6遺跡	北海道知内町字湯の里	134	大船F遺跡	北海道函館市大船町
52	札苅遺跡	北海道木古内町字札苅	135	豊崎N遺跡	北海道函館市豊崎町
53	釜谷遺跡	北海道木古内町字釜谷	136	精進川B遺跡	北海道函館市安浦町
54	大平遺跡	北海道木古内町字大平	137	亀田中野1遺跡	北海道函館市亀田中野町
55	新栄町遺跡	北海道木古内町字木古内	138	陣川町3遺跡	北海道函館市陣川町
56	蛇内2遺跡	北海道木古内町字札苅	139	札地貝塚	青森県下北郡東通村大字尻屋字念仏間
57	蛇内3遺跡	北海道木古内町字札苅	140	札地遺跡	青森県下北郡東通村大字尻屋字念仏間
58	大平2遺跡	北海道木古内町字古内	141	大平(1)遺跡	青森県下北郡東通村大字尻屋字八峠
59	高校高台遺跡	北海道木古内町字木古内	142	八峠遺跡	青森県下北郡東通村大字尻屋字八峠
60	鶴岡2遺跡	北海道木古内町字鶴岡	143	吹切沢遺跡	青森県下北郡東通村大字野牛字野牛川
61	新道4遺跡	北海道木古内町字達川	144	野牛チレツサ遺跡	青森県下北郡東通村大字野牛字野牛川
62	大平4遺跡	北海道木古内町字大平	145	下馬坂遺跡	青森県下北郡東通村大字白糠字下馬坂
63	建川2遺跡	北海道木古内町字建川	146	明神遺跡	青森県下北郡東通村大字白糠字明神川端
64	亀川遺跡	北海道木古内町字亀川	147	前坂下(2)遺跡	青森県下北郡東通村大字白糠字前坂下
65	亀川2遺跡	北海道木古内町字亀川	148	ムシリ遺跡	青森県下北郡東通村大字尻屋字八峠
66	泉沢2遺跡	北海道木古内町字二乃岱	149	村中遺跡	青森県下北郡東通村大字猿ヶ森字村中
67	釜谷5遺跡	北海道木古内町字釜谷	150	泊山遺跡	青森県下北郡東通村大字白糠字明神ノ上
68	大釜谷3遺跡	北海道木古内町字大釜谷	151	唐貝地貝塚	青森県上北郡六ヶ所村大字倉内字唐貝地
69	釜谷8遺跡	北海道木古内町字釜谷	152	二階坂遺跡	青森県上北郡六ヶ所村大字平沼字二階坂
70	亀川5遺跡	北海道木古内町字亀川	153	石川遺跡	青森県上北郡六ヶ所村大字出戸字柵沢
71	榎本町遺跡	北海道函館市榎本町	154	六原(2)遺跡	青森県上北郡六ヶ所村大字倉内字芋崎
72	高丘町遺跡	北海道函館市高丘町	155	市柳浜遺跡	青森県上北郡六ヶ所村大字平沼字道ノ下
73	豊原1遺跡	北海道函館市豊原町	156	鷹架貝塚	青森県上北郡六ヶ所村大字鷹架字道ノ下
74	函館公園B遺跡	北海道函館市青柳町	157	戸鎖(1)遺跡	青森県上北郡六ヶ所村大字鷹架字久保ノ内
75	滝ノ沢A遺跡	北海道函館市滝沢町	158	富ノ沢(2)遺跡	青森県上北郡六ヶ所村大字尾駒字上尾駒
76	滝ノ沢B遺跡	北海道函館市滝沢町	159	泊(4)遺跡	青森県上北郡六ヶ所村大字泊字焼山
77	滝ノ沢D遺跡	北海道函館市滝沢町	160	泊山遺跡	青森県上北郡六ヶ所村大字泊字泊山
78	滝ノ沢E遺跡	北海道函館市滝沢町	161	尾駒遺跡	青森県上北郡六ヶ所村大字尾駒字野附
79	滝ノ沢F遺跡	北海道函館市滝沢町	162	雲雀平(1)遺跡	青森県上北郡横浜町字明神平
80	滝ノ沢I遺跡	北海道函館市滝沢町	163	明神平遺跡	青森県上北郡横浜町字吹越
81	東山JB遺跡	北海道函館市東山村	164	桧木遺跡	青森県上北郡横浜町字家ノ前川目
82	東山D遺跡	北海道函館市東山村	165	鳥帽子平遺跡	青森県上北郡横浜町字二又
83	女名沢遺跡	北海道函館市庵原町	166	荒内川(1)遺跡	青森県上北郡横浜町字上イタヤノ木

表1-2 津軽海峡周辺の縄文晩期の遺跡(2)

No.	遺跡名	所在地	No.	遺跡名	所在地
167	荒内川(2)遺跡	青森県上北郡横浜町字荒内	249	二ツ沼遺跡	青森県五所川原市相内岩井
168	松守遺跡	青森県上北郡横浜町字太郎須田	250	岩井大沼遺跡	青森県五所川原市相内岩井
169	角違(1)遺跡	青森県むつ市大字城ヶ沢字角違	251	オセドウ遺跡	青森県五所川原市相内露草
170	桜木町遺跡	青森県むつ市桜木町	252	福島城跡	青森県五所川原市相内実取
171	梨の木平遺跡	青森県むつ市並川町	253	五月女藪遺跡	青森県五所川原市相内
172	宇曾利川(2)遺跡	青森県むつ市大字大湊字宇曾利川村	254	坊主沢遺跡	青森県北津軽郡中泊町大字小泊字坊主沢
173	江豚沢遺跡	青森県むつ市大字奥内字竹立	255	砂山(1)遺跡	青森県北津軽郡中泊町大字小泊字砂山
174	八森遺跡	青森県むつ市大湊浜町	256	折戸遺跡	青森県北津軽郡中泊町大字小泊字折戸
175	川守遺跡	青森県むつ市川守町	257	柴崎遺跡	青森県北津軽郡中泊町大字小泊字歟沢
176	大川目遺跡	青森県むつ市大字城ヶ沢字大川目	258	萱部遺跡	青森県北津軽郡中泊町中小泊山国有林631林班ほ小班
177	向闇(2)遺跡	青森県むつ市大字奥内字向闇	259	弁天島遺跡	青森県北津軽郡中泊町権現崎国有林635林班か小班
178	向闇(3)遺跡	青森県むつ市大字奥内字向闇	260	縄文沼遺跡	青森県北津軽郡中泊町中小泊山国有林626林班は小班
179	桃山遺跡	青森県むつ市大字田名部字下平	261	鮫山遺跡	青森県北津軽郡中泊町中小泊山国有林634林班い小班
180	家ノ辺遺跡	青森県むつ市川内町家ノ辺	262	冬部(1)遺跡	青森県北津軽郡中泊町中小泊山国有林607林班ハ小班
181	田野沢山遺跡	青森県むつ市川内町田野沢山	263	龍神遺跡	青森県北津軽郡中泊町権現崎国有林635林班ル小班
182	田野沢(1)遺跡	青森県むつ市川内町田野沢	264	阿曾内遺跡	青森県北津軽郡中泊町権現崎国有林635林班る小班
183	上野松山遺跡	青森県むつ市川内町宿野部上野松山			
184	勘七沢遺跡	青森県むつ市川内町下小倉平			
185	葛沢遺跡	青森県むつ市川内町家ノ上			
186	岩谷沢遺跡	青森県むつ市川内町高野山国有林第24林班			
187	不備無遺跡	青森県むつ市川内町宿野部中野平			
188	戸沢遺跡	青森県むつ市川内町戸沢			
189	熊ヶ平(3)遺跡	青森県むつ市川内町熊ヶ平			
190	香ノ木遺跡	青森県むつ市川内町蔚崎香ノ木			
191	水木沢(1)遺跡	青森県むつ市大畠町水木沢			
192	水木沢(3)遺跡	青森県むつ市大畠町水木沢			
193	大沢遺跡	青森県むつ市脇野沢七沢			
194	九艘泊(1)遺跡	青森県むつ市脇野沢九艘泊			
195	九艘泊岩陰遺跡	青森県むつ市脇野沢九艘泊			
196	山の上遺跡	青森県むつ市脇野沢田ノ頭			
197	寄浪遺跡	青森県むつ市脇野沢寄浪			
198	瀬野川目(2)遺跡	青森県むつ市脇野沢瀬野川目			
199	小倉畠遺跡	青森県下北郡風間浦村大字易国間字小倉畠			
200	易国間遺跡	青森県下北郡風間浦村大字易国間字小易国間			
201	下風呂(2)遺跡	青森県下北郡風間浦村大字下風呂字下風呂			
202	奥戸遺跡	青森県下北郡大間町大字奥戸字奥戸村			
203	冷水遺跡	青森県下北郡大間町大字大間字冷水			
204	ドウマンチャ貝塚	青森県下北郡大間町大字大間字大間平			
205	奥戸上道遺跡	青森県下北郡大間町大字大間字奥戸上道			
206	小奥戸(3)遺跡	青森県下北郡大間町大字奥戸字小奥戸			
207	ニツ石(4)遺跡	青森県下北郡大間町大字奥戸字ニツ石			
208	沼ノ平遺跡	青森県下北郡佐井村大字長後字沼ノ平・縫道 石山国有林第98林班			
209	牛滝寺ノ沢遺跡	青森県下北郡佐井村大字長後字細間			
210	館下遺跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字蟹田南沢館下			
211	丑ヶ沢(2)遺跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字蟹田丑ヶ沢			
212	姥ヶ沢遺跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字蟹田姥ヶ沢			
213	今津(1)遺跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字平館今津才の神			
214	尻高(2)遺跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字平館今津尻高川			
215	尻高(3)遺跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字平館今津尻高川			
216	尻高(4)遺跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字平館今津尻高			
217	今津(2)遺跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字平館今津才の神			
218	今津(3)遺跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字平館今津才の神			
219	石崎沢(1)遺跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字平館石崎沢			
220	石崎沢(2)遺跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字平館石崎沢			
221	山居(1)遺跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字平館根岸山居			
222	弥戻釜(2)遺跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字平館弥戻釜			
223	宇鉄遺跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字三厩村金野澤			
224	算用師遺跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字三厩算用師右平野			
225	上野遺跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字三厩六條間			
226	流平遺跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字三厩流平			
227	下平遺跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字三厩元宇鉄			
228	中ノ平遺跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字三厩中ノ平			
229	鍋泊遺跡	青森県東津軽郡今別町大字鍋泊			
230	裳月洞窟遺跡	青森県東津軽郡今別町大字裳月			
231	大泊遺跡	青森県東津軽郡今別町大字大泊字上崎			
232	山崎(1)遺跡	青森県東津軽郡今別町大字山崎字山元			
233	山崎(3)遺跡	青森県東津軽郡今別町大字山崎字山崎			
234	西田五郎兵衛遺跡	青森県東津軽郡今別町大字今別字西田			
235	西田(1)遺跡	青森県東津軽郡今別町大字今別字西田			
236	大川平閑口遺跡	青森県東津軽郡今別町大字鍋田字閑口			
237	浜名遺跡	青森県東津軽郡今別町大字浜名字浜名			
238	ニッ石遺跡	青森県東津軽郡今別町大字浜名字ニッ石			
239	黒崎沢遺跡	青森県東津軽郡今別町大字浜名字黒崎沢			
240	鍋田閑口遺跡	青森県東津軽郡今別町大字鍋田字閑口			
241	中宇田(2)遺跡	青森県東津軽郡今別町大字浜名字中宇田			
242	中宇田(3)遺跡	青森県東津軽郡今別町大字浜名字中宇田			
243	浜名中野遺跡	青森県東津軽郡今別町大字浜名字中野			
244	浜名沢遺跡	青森県東津軽郡今別町大字浜名字浜名沢			
245	大川平村元遺跡	青森県東津軽郡今別町大字大川平字村元			
246	大川平深沢遺跡	青森県東津軽郡今別町大字大川平字深沢			
247	玉松台遺跡	青森県東津軽郡蓬田村大字瀬辺字山田			
248	坂元(3)遺跡	青森県東津軽郡蓬田村大字広瀬字坂元			

3. 事例の検討

(1) 洞爺湖町高砂貝塚

はじめに多くの墓坑に人骨が伴っており、被葬者の性別・年齢が判明している高砂貝塚の墓について検討する。

胆振支庁管内西部の洞爺湖町にある高砂貝塚は、噴火湾を望む標高 10m 前後の台地上に位置し、2021 年、南東に隣接する入江貝塚とともに世界文化遺産に登録された。高砂貝塚では 1962 年の予備調査、1963 年の第 1 次調査、1965 年の第 2 次調査により、計 28 基の墓坑と配石遺構が確認されている（三橋ほか 1987）。墓の時期は出土土器から大洞 C2 式古段階と考えられる。

墓坑は南東側のグループ 10 基 (G1~6・20~22・25) と北西側のグループ 18 基 (G7~19・23・24・26~28) に分かれ、北西側のグループは小環状列石群に隣接する（図 2）。

28 基全ての土坑に赤色顔料（ベンガラ）が見られ、うち 16 基（約 57%）は配石を伴うが、マウンドが確認されているのは 2 基（約 7%）のみである（表 2）。墓坑上面から中位に壺や鉢などの土器の供献が見られた墓は 6 基（約 21%）、墓坑底面に土器が副葬されていた墓は 6 基あり、うち G10 と G26 ではその両者が見られた。土器が供献・副葬された 9 基の墓のうち、3 基は幼児、2 基は小児が葬られており、子供の墓が半数以上を占めている点が注目される。

被葬者の内訳は、成人男性 5 名、成人女性 10 名、性別不明の成人 1 名、小児 6 名、幼児 4 名、年齢・性別不明 2 名で（図 3）、南東側と北西側のどちらのグループにも成人男性・成人女性・小児・幼児の墓が含まれている（図 2）。なお G4 からは成人女性骨とともに胎児骨が見つかっており、被葬者は妊婦と見られる。

被葬者の年齢・性別と墓坑の大きさについて検討したが、成人と小児、小児と幼児、男性と女性で大きさに重複がみられ、明確な違いは見出せない（図 4）。G28 は直径 50cm の小型の墓坑に熟年女性が座位屈葬の状態で葬られていた。もし骨が残っていないければ、墓坑の大きさから小児もしくは幼児の墓と判断された可能性が高い。墓坑の大きさから年齢や性別を推測するの

は危険であることを認識すべきである。

死者が身につけていたと考えられる装身具としては、G4 の成人女性の鹿角製垂飾 2 点とヒスイ製勾玉 1 点、G12 の 8 歳前後の男児のヒスイ製管玉 1 点がある。

副葬品と考えられる石器には石槍・石鏃・石斧・石匙がある。石槍は熟年男性墓 (G6)、石鏃は成人男性墓 (G11) に 2 点と熟年女性墓 (G14) に 1 点、石斧は成人男性墓 (G5)、石匙は成人女性墓 (G4) に副葬されていた。他に副葬品としては、8 歳前後の男児墓 (G12) 出土の骨針 2 点と成人女性墓 (G19) 出土の結合釘先 1 点がある。副葬品で注目されるのが、G10 に葬られた 4 歳前後の幼児の腰脇に置かれていた緑色凝灰岩製小玉 30 点を収めた無文壺である。この墓は、マウンドと配石を伴う上、墓坑の壁に設けた張り出し部にも壺が供献されており、高砂貝塚では最も厚葬の墓といえる。

墓域に隣接する 9 基の小環状列石群は立石を伴うもの（4 基）と寝石のみのもの（5 基）がある。前者は全て下に土坑を伴い、後者は 5 基中 2 基に土坑がみられる。小環状列石を伴う土坑 6 基中 3 基にはベンガラが伴う。小環状列石からも小型の土器や石製小玉など、墓坑と同じような遺物が発見されている。例えば立石を伴う No.3 環状列石からは、ヒスイ製丸玉と蛇紋岩製丸玉各 1 点と鹿骨製針状製品 1 点、No.9 環状列石では配石下の土坑底に 3 点の小型壺（うち 1 点は内部にベンガラを充填）が置かれ、埋土中からは土偶が出土している。墓域に隣接するこれら小環状列石群は、葬送儀礼に関連した遺構であり、下部に土坑を伴うものは再葬墓の可能性を指摘したい。

以上、高砂貝塚の墓の特徴は次のようにまとめられよう。

- ・墓域は複数に分かれるが、同一墓域に成人男女・小児・幼児が葬られており、年齢や性別での墓域の使い分けはない。
- ・墓の構造や供献・副葬品の有無に関して差がみられるが、性別や年齢との対応は見られない。
- ・マウンドを伴う、複数の土器を供献・副葬するなど他の墓に比べ手厚く葬られた幼児や小児の墓が存在す

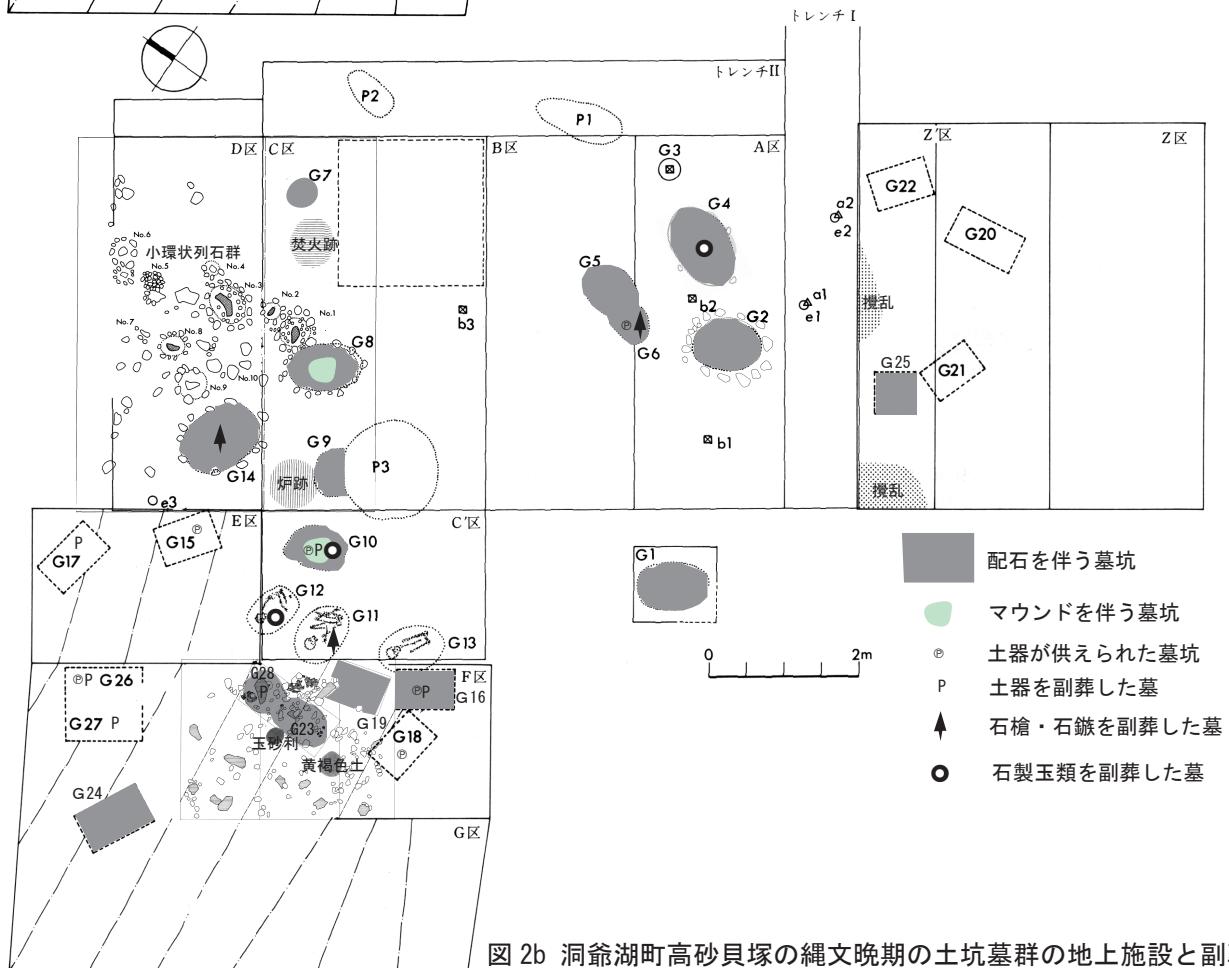
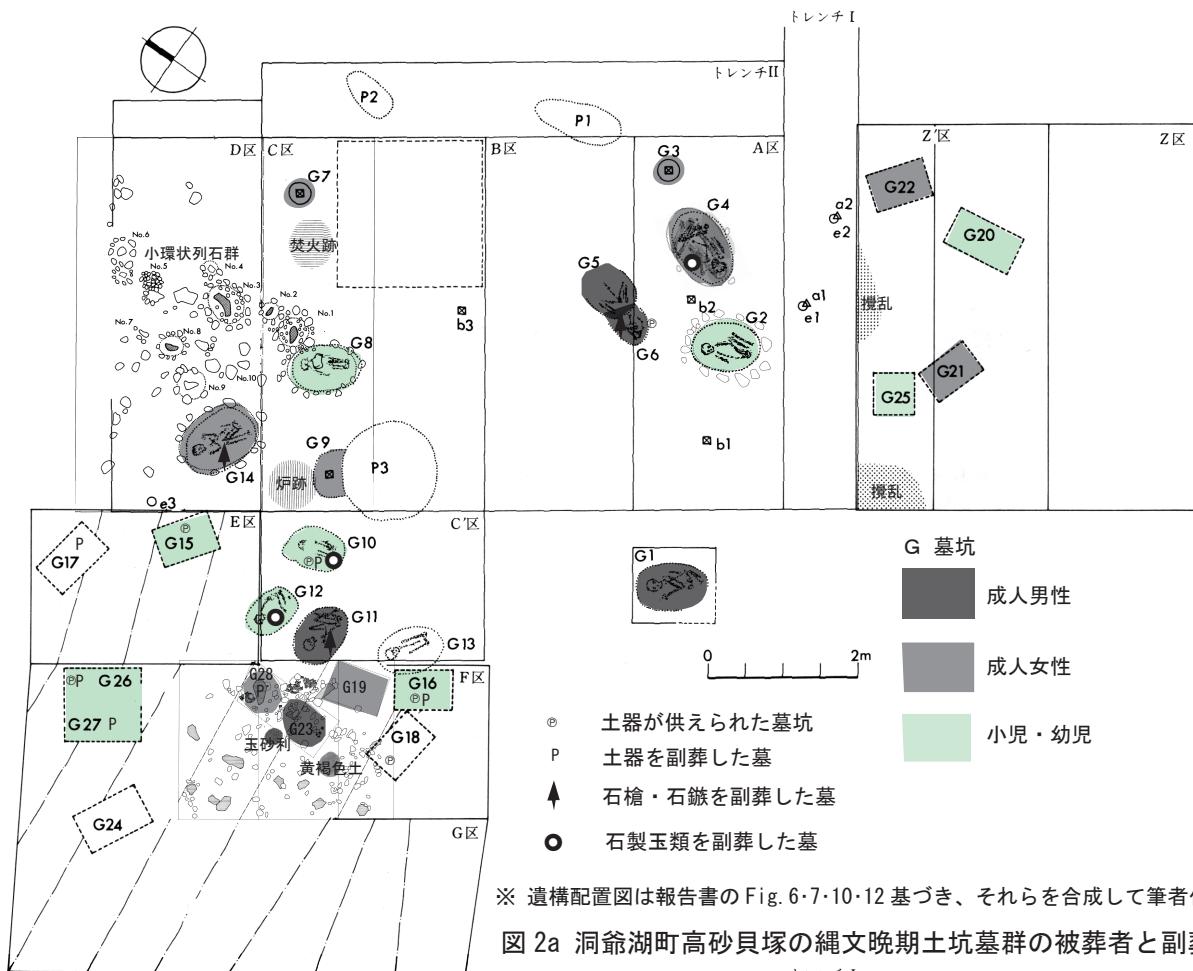


表2 洞爺湖町高砂貝塚の墓坑一覧

墓坑	墓坑(cm)		盛配	ベンガラ	被葬者		供献・副葬土器		骨角器	石器			石製玉		備考	
	長軸	短軸			土石	性別	年齢	墓坑上～中位		石槍	石鎌	石斧	石匙	丸管	勾	
G1	100	65	○	○	男性	熟年										
G2	90	65	○	○	不明	13・14歳										
G3				○	女性	熟年										
G4	110	70	○	◎	女性	成年			2				1		1 鹿角製垂飾2 ヒスイ製勾玉1	
G5			○	○	男性	成年							1			
G6			○	○	男性	熟年	粗製鉢1			1						
G7			○	○	女性	成年										
G8	90	60	○	○	○	不明	9歳前後								抱石	
G9			○	○	女性	熟年										
G10	80	65	○	○	○	不明	4歳前後	粗製壺1	玉入り無文壺1					30		
G11	90	60		○	男性	成年						2			黒曜石製石鎌2	
G12	72	56		○	男性	8歳前後			2					1	骨針2 ヒスイ製管玉1	
G13	95	65		○	女性	成年										
G14	110	75	○	○	女性	熟年						1			黒曜石製石鎌1	
G15			○	◎	不明	13～15歳	粗製壺1 鉢2									
G16	60	45	○	◎	不明	3・4歳	粗製壺1	粗製壺1							足方墓坑外石	
G17	105	55		○	不明	成人		粗製壺1 深鉢1								
G18	100	55		○	不明	不明	粗製壺2									
G19			○	○	女性	成年			1						結合釣針先1	
G20				○	不明	10～12歳										
G21	85	60		◎	女性	成年										
G22				○	女性	成年										
G23			○	◎	男性	成年										
G24	85	65	○	○	不明	不明										
G25	60	45	○	○	不明	1歳									ホタテ貝供獻	
G26				◎	不明	小兒	小型台付深鉢1	小型台付深鉢1 無文鉢1								
G27				○	不明	3～4歳		粗製鉢1								
G28	50	50	○	◎	女性	熟年		鉢3							座位屈葬	

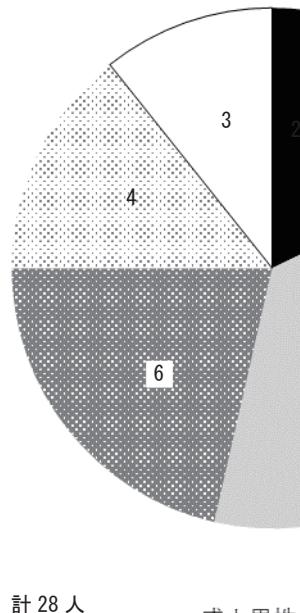


図3 高砂貝塚の被葬者の割合

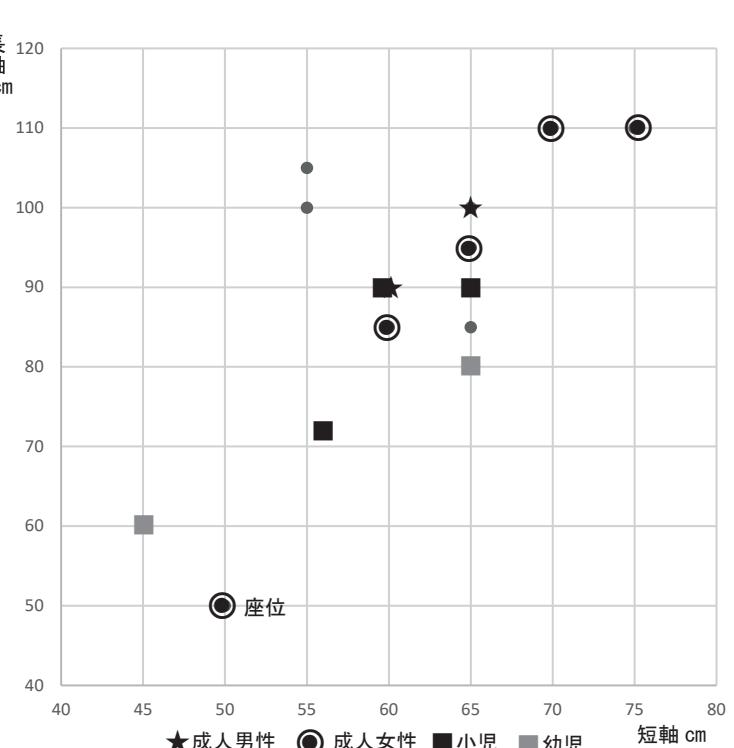


図4 高砂貝塚の墓坑の大きさと被葬者の年齢・性別

る。

- ・土坑墓群に隣接して再葬墓を含むとみられる小環状列石群が存在する。

(2) 白老町社台1遺跡

社台1遺跡は苫小牧市と白老町の境を流れる別々川右岸の台地先端部東側の標高7~15mの傾斜地に立地し、現在の海岸から約800m内陸に位置する。北海道縦貫自動車道建設に伴う発掘調査により、縄文晩期中葉大洞C2式古段階の堅穴住居跡1棟と72基の土坑墓が検出されている（北海道埋蔵文化財センター1981）。

土坑墓は住居跡の上方斜面の南北の尾根筋を中心とし、標高10~13mの緩斜面に沿って東西に広がる土坑墓群（中央墓群）を中心に、それより上方の尾根筋に集中する土坑墓群（上方墓群）24基と、住居跡に隣接する8~10m前後の尾根筋に集中する土坑墓群（下方墓群）10基の3箇所に分かれて分布する（図5）。

粘土のマウンドをもつ土坑墓4基と砂利のマウンドを持つ土坑墓2基は全て中央墓群で見つかっている（図5a）。72基中ベンガラが確認された土坑墓は8基で、下方墓群5基、中央墓群3基と、下方墓群に偏る。一方、供献・副葬土器や玉類・石鏃などの副葬品を持つ墓は分散しており、特定の墓群に集中することはない（図5b）。

漆器が副葬されていた19号墓と22号墓は、他の土坑墓に比べ厚葬といえる（表3）。即ち19墓には籠胎漆器1点のほか、墓坑上に7点、土坑内に1点、計8点もの土器と石鏃2点、ヒスイ製の勾玉1点、同じく白玉1点、滑石製の丸玉16点、同じく白玉1点など多数の副葬品を伴っている。一方ベンガラが敷かれた土坑底面から細い棒状の漆製品が出土した27号墓は、粘土のマウンドを伴っている。他に注目される墓坑に計110点もの玉類が出土した55号墓がある。55号墓は土坑底面にベンガラが敷かれ、滑石製の勾玉2個と100個の丸玉を連ねた首飾り、同じく足首に巻いていたと思われる滑石製の丸玉10点が連なった状態で発見されている。これら3基の墓坑は全て中央墓群に属

する。

(3) 木古内町大釜谷3遺跡

大釜谷3遺跡はサラキ岬から北東に約4km、木古内町の北東端部に位置し、津軽海峡を望む大釜谷川左岸の標高30m前後の海岸段丘上の緩傾面に立地する。木古内町教育委員会の発掘調査により、縄文晩期中葉大洞C2式古段階の土坑墓38基が検出されている（木古内町教育委員会2003）。

土坑墓は、南側の8基（A群）と北側の30基（B群）に分かれて分布する（図6）。38基中、砂利のマウンドをもつ墓8基、土坑底面に溝や柱列を持つ墓6基、その両者が見られる墓が1基あり、それらはA・Bのどちらからも発見されている。一方で、副葬品を持つ墓はB群に限られ、A群にはない。このうち8Pと53Pからは、死者が着装していたとみられる環状漆塗り耳飾り2点とヒスイ製の丸玉2点が出土している。また57Pの覆土中からは生漆地にベンガラを混ぜた赤漆で入組文を描いた籠胎漆器の鉢が1点出土している。

(4) 木古内町札苅遺跡

札苅遺跡は木古内町の中心部から東に3km、札苅駅西側の国道228号線と道南いさりび鉄道の線路に挟まれた標高8~12m前後の海岸段丘上に立地する。1971・72年に北海道開拓記念館が行った発掘調査により、縄文中期と後期末の堅穴住居跡各1棟、縄文晩期中葉～恵山式期の組石遺構1基、縄文晩期中葉大洞C2式古段階から晩期後葉の大平段階の土坑墓60基が検出されており、そのうちの57基が調査されている（北海道開拓記念館1976）。

報告書では土坑墓をI（4列より西側）・II（5列より東側）・III（I5とその南側）の3ブロックに分けているが、分布状況からみてそうしたグルーピングは難しいように思われる。大部分の土坑墓の長軸方向はN30°W～N94°Wに集中しており、遺存していた歯骨などから東頭位4基、西頭位2基と報告されている。土坑墓に重複は全く認められない。

札苅遺跡の土坑墓群に関しては、瀬川拓郎や阿部朝衛が検討を行っている。瀬川は土坑墓を東西の2グループに分けたうえで、副葬品（石鏃・石斧・玉など）

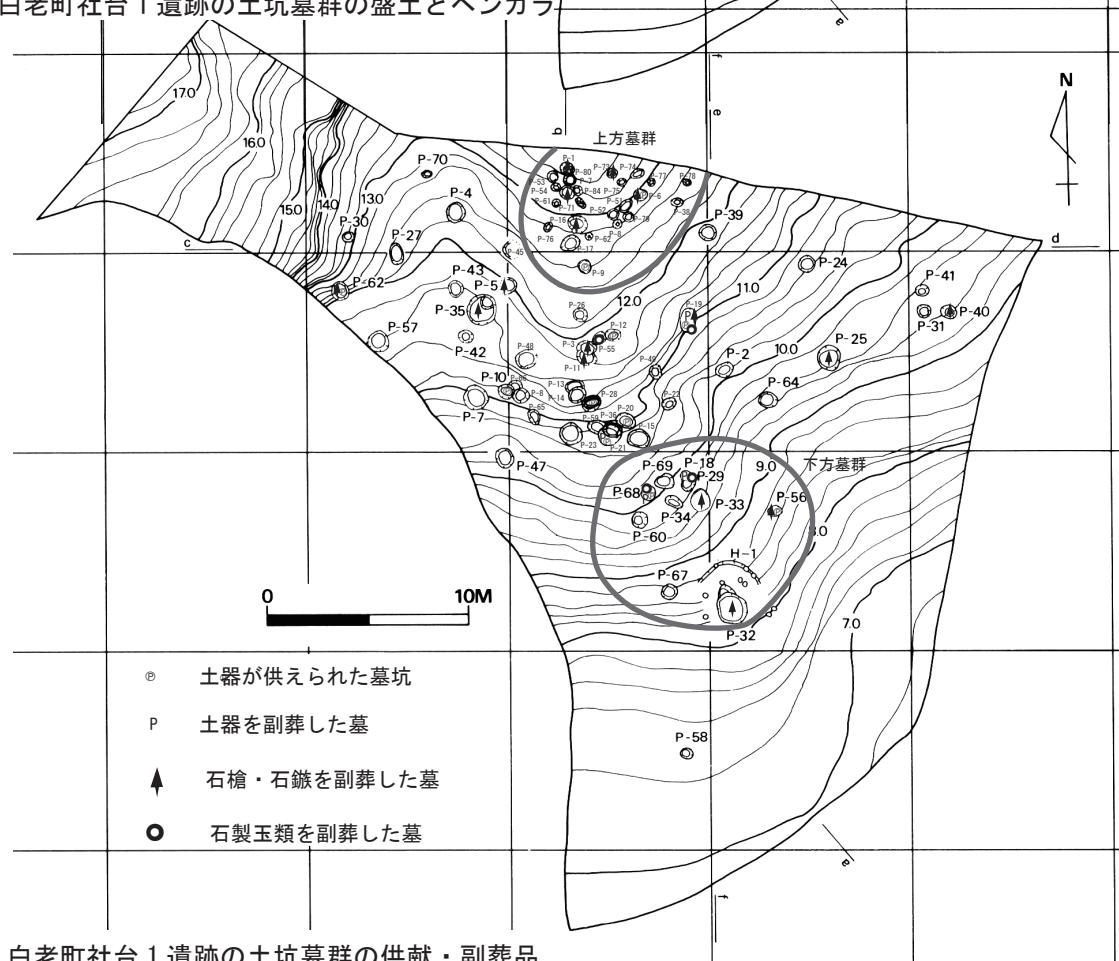
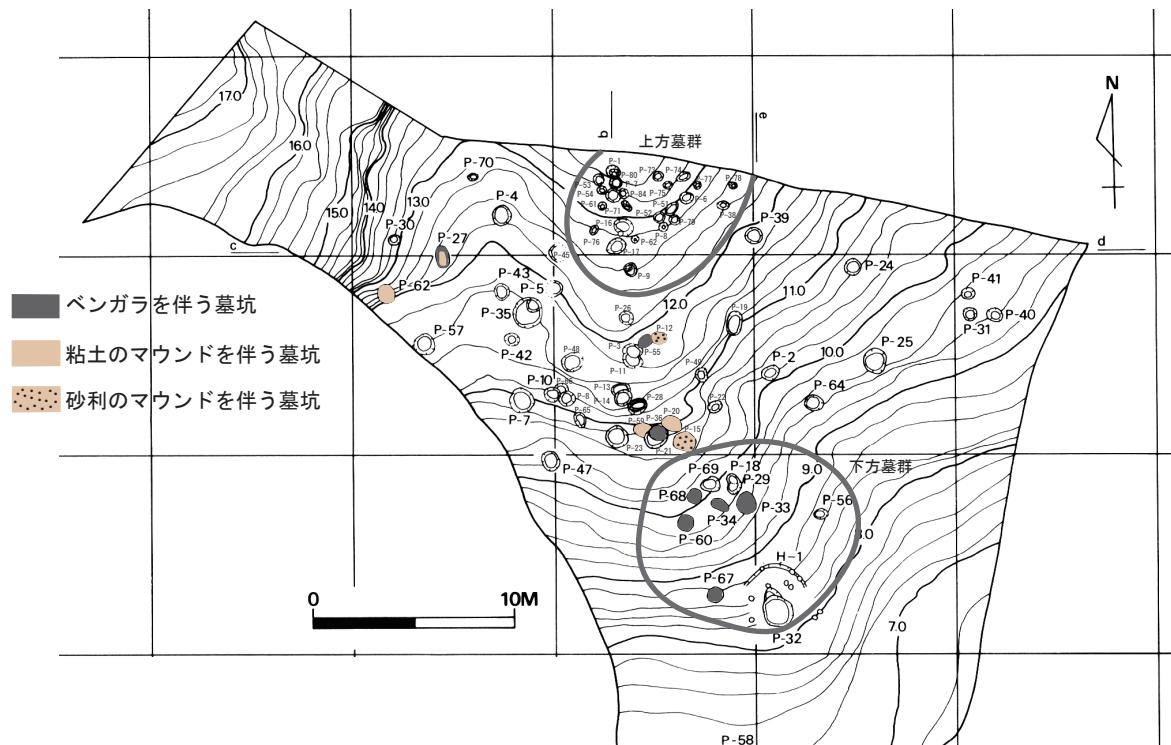


表3 白老町社台1遺跡の墓坑一覧

墓 坑	墓坑 形態	墓坑(cm) 短軸 長軸	盛土 砂利	ベン 粘土 ガラ	供献土器		漆 器	石器							石製玉			備考	
					墓坑上～中	墓坑底面		石槍	石鎌	石斧	石匙	石錐	搔器	石皿	石刀	敲石	凹石	橢円礫	
1	円形								1										1→80
2	長円形	107	62																
3	円形								1										11→3
4	円形	108	104			赤漆塗壺1・台付鉢1	深鉢1						1						35→5
5	円形									1									
6	長円形	105	66							4			3						
8	長円形	93	67								2								66→8
9	円形	85	77			深鉢1				1							1		
10	円形	76	70				粗製壺1						3						10→66
11	円形		100							1			1						3·55→11
12	円形		65	○		粗製壺1・台付鉢1						1			1				55→12
13	長円形									1									13→14
14	長円形	93																	13→14
15	円形	108	94	○															
16	長円形	97	76							1							3		
17	長円形	82	72																
18	長円形						無文鉢1			1			1			1			2·29→18
19	長円形	108	82			注口土器1・台付鉢4・ 粗製鉢1・赤漆塗浅鉢1		赤漆塗浅鉢1	1		2		1	1				16 2 1	藍胎漆器浅鉢1
20	長円形	96	76	○		粗製深鉢1													底面から炭化材
21	長円形					粗製深鉢1		粗製深鉢1											36→21
22	長円形	72	59									1							
23	円形	120	113																
24	円形	78	70																
25	円形	129	123							1	1								
26	長円形	75	53																
27	長円形	116	89	○ ○				1											
28	長円形	91	60			台付鉢1													44→28
29	長円形					粗製小型壺1・小型鉢1							1						29→18 剥片塊
30	長円形	63	56																
31	円形	77	73									1	1						
32	長円形	182	151							1	1	1							
33	長円形	124	90		○					1						1			
34	長円形	96	69		○												2		
35	円形									1			1						35→5
36	円形				○														36→21
38	長円形	64	45																
39	長円形	95	75													1			
40	円形	88	78							7		1				3			
41	円形	62	53									1	1						
42	円形	99	91																
43	円形	90	75													1			
44	長円形	106	86																44→28
45	円形									1									
46	円形																		
47	長円形	87	75																
48	長円形	94	74																
49	円形	66	64																
50	円形	58	56																
51	長円形											1							
52	円形	50	49								1	1							
53	長円形	64	51																
55	長円形	89	56	○		深鉢1				3	1						110	2	55→11·12
56	円形	50	43																
57	長円形	115	97																
58	円形	67	62																
59	長円形				○														
60	長円形	74	59		○														
62	円形	106	98	○		粗製鉢1				1									
63	長円形	52	42																
64	長円形	78	73																
65	長円形	69	60																
66	長円形	72	65																10→66→8
67	長円形	90	77	○															
68	円形	72	70	○		鉢1						1					1		
69	長円形	103	76																
70	長円形	45	31																
71	長円形									1	2		1		1	1	1	2	
72	円形		73									1					2		1→80→72
73	長円形	60	49							1									
74	長円形	63	58																
80	円形	54																	1→80→72
83	円形																		

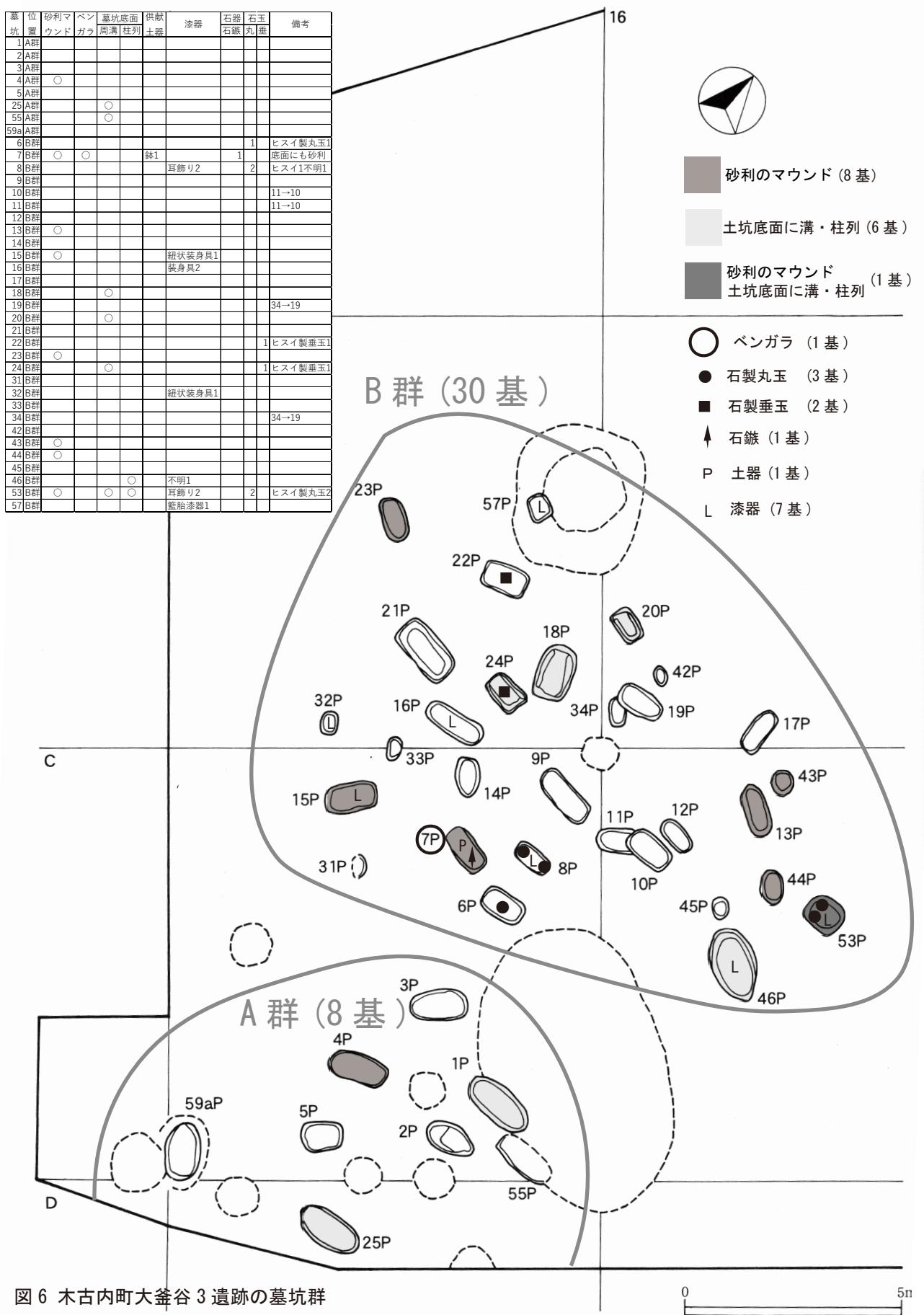


図 6 木古内町大釜谷 3 遺跡の墓坑群

や墓坑の大きさなどから、「性差による墓域分割と幼児埋葬の女性への付隨」を指摘した（瀬川 1980）。しかし土坑墓のグルーピング、副葬品による被葬者の性別の判断、墓坑の大きさによる幼児墓の抽出、ベンガラの散布状況に基づく頭位方向の推測など、いずれも恣意的な判断が目立つ。札苅遺跡から出土した石鏃を分析した阿部は、土坑墓の副葬品に「厚葬・薄葬」が見られる、石鏃が大型の土坑墓に副葬されている、土坑墓に副葬された石鏃は大型で副葬用に少人数によって製作された可能性が高いことなどを指摘している（阿部 1998）。

改めて札苅遺跡の土坑墓の構造と供獻・副葬品の状況をみてみよう（表4・図7）。札苅遺跡の土坑墓の多くはマウンドを伴っており、マウンドには砂利のもの28基、粘土のもの3基、砂利と粘土の両方を用いたものの6基が確認されているが、その配置や分布に傾向性は見られない。一方、ベンガラは18基にみられ、土坑内部が未調査のもの3基を除けば、3分の1強の墓にベンガラが伴っていることになる。ベンガラを伴う墓は、墓域の中央に集中しており、縁辺部には見られない（図7上）。札苅遺跡の土坑墓は石鏃を伴う墓と石製の玉類を伴う墓に分かれ、石鏃と石製玉類の両方が見つかった墓はない。また石製の玉類を持つ墓を取り囲むように、石鏃を伴う墓が分布する（図7下）。

砂利のマウンドとベンガラに加え、赤彩された小型の鉢・壺各1点、54点の石鏃と石斧1点を伴う41号墓、砂利のマウンドとベンガラに加え、計13点もの土器が供えられていた73号墓は他の墓に比べて明らかに厚葬といえる。

（5）五所川原市五月女泡遺跡

五月女泡遺跡は津軽平野を縦断する岩木川が日本海に注ぐ十三湖北岸の標高5～8m前後の砂丘上に立地する。発掘調査により土坑197基・掘立柱建物跡2棟・柱穴22基・土器埋設遺構6基・集石遺構1基・道路状遺構1条・柵列2条などの縄文時代の遺構が検出されている（五所川原市教育委員会 2017）。

土坑197基のうち、形態・構造・堆積物・出土遺物から138基が土坑墓と考えられている（表5）。土坑墓

はI～IVの4箇所の墓域に分かれて分布する（図8）。このうち中心となるのが丘陵頂部を取り囲むように環状に分布する墓域Iだが、中心部は元々土坑墓がないのか、風雨により失われたかは不明とされている。なお墓域Iの土坑墓は等高線に沿っており、特定の方向性は認められない。

土坑墓の多くは遺物包含層と重なっており、埋土には土器片などの遺物が多く混入していた。土坑墓に直接伴う土器は確認されていないため、土坑墓の時期は、埋土に含まれている最も新しい時期の土器に基づき、その時期以降に構築されたものと認定している。土坑墓は2b群土器（後期後葉）から8群（晚期後葉）に及ぶ。営まれた時期が特定できた土坑墓は92基あり、2b群（後期後葉）～3（晚期初頭：大洞B1式期）11基→4群（晚期前葉：大洞B2式期）12基→5群（晚期前葉：大洞BC式期）17基→6群（晚期中葉：大洞C1式期）24基→7群（晚期中葉：大洞C2式／聖山I式期）～8群（大洞A1式／聖山II式期）28基と、晚期中葉をピークとする。

土坑墓は後期後葉から晚期初頭にかけて、墓域Iの西側部分、すなわち標高9m前後の丘陵頂部付近から営まれ始める（図9）。続く晚期前葉の大洞B2式期には墓域Iの南側部分や墓域IIにも土坑墓が営まれるようになる。晚期前葉の大洞BC式期から中葉の大洞C1式期にも墓域IとIIが踏襲されるが、墓域Iでは北側にも土坑墓が展開するようになる。晚期中葉から後葉になると墓域Iでは土坑墓は南側に集中し、北側には新たな墓は作られなくなる。

五月女泡遺跡は、調査の途中で保存が決定したため、調査区内で確認した全ての遺構を完全に調査したわけではない。土坑墓に関しても、完掘したもの、半裁し、半分は未調査のもの、確認しただけで、掘り下げていないものが混在している。

土坑墓が営まれ始めた後期後葉～晚期初頭には約半数の土坑墓にベンガラが伴っていたが、次第にベンガラを伴う墓の割合は低下し、晚期中葉の大洞C2式／聖山I式期～晚期後葉の大洞A1式／聖山II式期には全体の約10分の1にまで減少する（図10）。

マウンドを持つ土坑墓は晚期前葉の大洞BC式期に

表4 木古内町札苅遺跡の墓坑一覧

墓坑	マウンド(盛土)		配石	ベンガラ	供献土器		土器片 利用有 孔円板	漆器	石器					歫 歯 丸	石製玉 白 勾	備考	
	砂利	粘土			墓坑上～中	墓坑底面			石鏹	石斧	石匙	石錐	搔器	石刀			
1				○		赤彩小壺1											
2				○													
3	○																
5	—	—	—	—	—	—											上部削平
6				○				○									
7	○																
8			○							2							
10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	未調査
21																	
22																	
23	○																
25			○	○	壺1 小壺1										3		聖山Ⅰ式
27	○														1		
30	○				鉢1 小壺1				1								大洞C2式
32			○		鉢2												聖山Ⅱ式
33	○																
34	○														1		
35	○																
36	○			○	鉢1 小壺1										1		大平段階
37			○						4								
39	○																
40	○																
41	○			○	赤彩小鉢1 壺1			54	1								大洞C2式
42				○											1		
43																	
45		○															
46	○																
48																	
49	○																
50																	
51																	
52	○					赤彩小壺1	○				1				5		
53	○														3		
54	○			○													
55	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	未調査
56	○		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	未調査
58		○				壺1	○	2									大洞C2式
59	—	—	—	—	—	—		1									上部削平
60	—	—	—	—	—	—											上部削平
61																	
62																	
63									1								
64	○																
65			○														
66			○	○													
67	○			○													
68			○	浅鉢1 小壺1 台付鉢1													大洞C2式
69	○														1		
70																	
71	○																
72	○			○											1		
73	○			○	深鉢2 小型台付鉢5 鉢1 小型壺5		○										大洞C2式
74	○				○				10								
75	○				○												
76																	
77	○			○	壺1		○	9									聖山Ⅱ式
78	○			○											1		
87				○	浅鉢1 壺1	小型鉢1											大洞C2式
88					浅鉢1						7						聖山Ⅱ式
89	○			○	皿1 壺1						1						大洞C2式

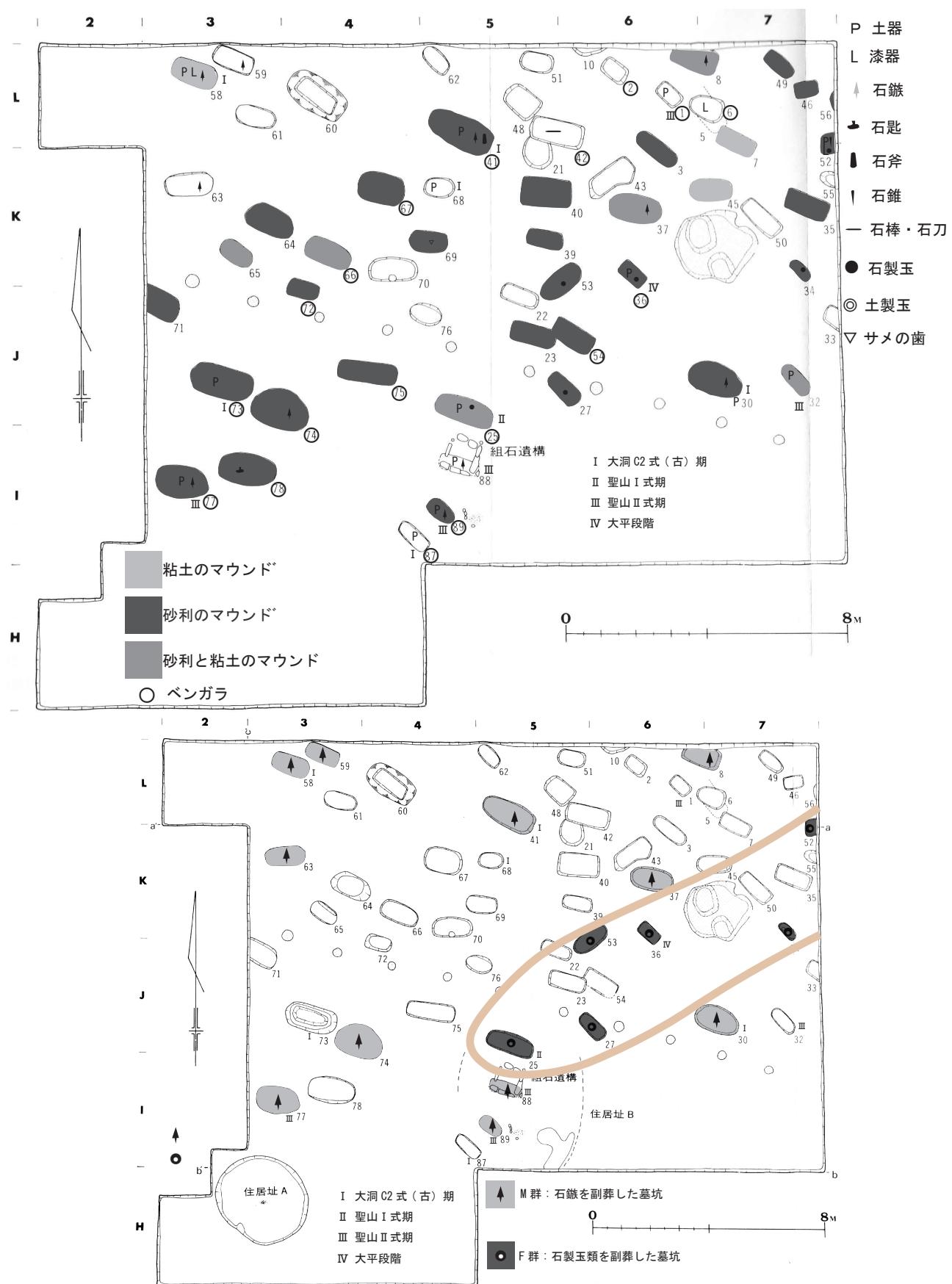


図7 木古内町札苅遺跡の墓坑群

表5 五所川原市五月女范
遺跡の墓坑一覧

【墓坑の時期区分】

2b群：縄文後期後葉

2c群：縄文後期末葉

3群：縄文晚期初頭
(大洞B1式期)4群：縄文晚期前葉
(大洞B2式期)

5群：縄文晚期前葉

(大洞BC式期)

6群：縄文晚期中葉

(大洞C1式期)

7群：縄文晚期中葉

(大洞C2式/聖山I式)

8群：縄文晚期後葉

(聖山II式/大洞A1式)

※発掘調査で確認されている縄文時代の土坑のうち、報告書では138基を土坑墓認定している(第2分冊第4章)が、本表にはそのうち、報告書の遺構の記載(第1分冊第3章)の記載で墓と報告されている99基についてまとめた。

土坑	時期	墓坑(cm)	被葬者	マウンド	底面	ベンガラ	石器	土製歎	石玉	土玉	備考		
											長軸	短軸	
1	2b群以降	157 85			—								
3	不明	89 65			—								
4	7群以降	126 89			—			1					
5	不明	127 73			— ○								
6	不明	189 129	不明	乳児	— ○		1	42			ヒスイ勾玉1 ヒスイ丸玉・白玉18		
7	5群以降	143 81			— ○		2				150より新しい		
9	不明	126 48			— ○								
11	不明				— ○								
14	不明	162 89			— ○								
20	不明	66 51			— ○			2			ヒスイ製丸玉2		
23	4群以降	165 69											
24	6群以降	142 83			○						152より新しい		
25	6群以降	140 59			○						152より新しい		
28	5群以降	131 84			○			1	1	ヒスイ製白玉1			
30	不明	179 90			○								
36	7群以降	274 170			○						100より新しい		
37	2c群以降	83 63			○						半裁調査		
39	7群以降	157 98			○						半裁調査		
40	7群以降	149 102			○						半裁調査		
41	7群以降	172 164			○						半裁調査		
42	7群以降	160 105			○						半裁調査		
43	6群以降	138 89			○						半裁調査		
44	6群以降	116 108			○ ○						半裁調査		
46	6群以降	196 166			○						半裁調査		
47	6群以降	188 122			○						半裁調査		
51	7群以降	157 142			○ ○		1				半裁調査 56より新しい		
53	7群以降	175 124			○ ○						半裁調査		
54	7群以降	155 147			○ ○						半裁調査 56・72・128より新しい		
56	6群以降	238 133			○						半裁調査 51・54より古い		
57	7群以降	123 88			○			2			半裁調査		
58	7群以降	218 174			○ ○						半裁調査		
59	6群以降	115 78			○ ○						半裁調査		
60	5群以降	110 94			○			7			ヒスイ製丸玉2		
63	7群以降	160 105			○			5			64より新しい		
64	7群以降	155 65			○ ○								
65	5群以降	81 37			○			1					
66	8群以降	199 131			○ ○				1		67より新しい		
67	8群以降	176 151			○		1	1	1		66より古く、161より新しい		
68	5群以降	157 131			○						半裁調査		
69	7群以降	179 111			○ ○						半裁調査		
71	8群以降	162 146			○			16			半裁調査 73より古いボタン状石製品ヒスイ製丸玉4		
72	7群以降	211 202			○ ○			2			半裁調査 54より古く、73・111・128より新しい		
73	7群以降	197 125			○ ○			6			6半裁調査 72より古く、71より新しい		
74	2b群以降	231 176	不明	壯年	— ○						北頭仰臥屈葬		
77	7群以降	197 125			— ○			2			2半裁調査 115より古い		
93	8群以降	130 79	女性	9歳前後	—				1				
94	6群以降	123 71	女性	18歳以上	—	—	—				底面のみの検出		
97	6群以降					○					24より古い		
100	4群以降	181 99			○						36より古い		
107	5群以降	90 72			○						半裁調査		
109	4群以降	87 64			○								
113	5群以降	122 79			○			1					
115	7群以降	182 154			○			3	3		半裁調査 57より新しいヒスイ製丸玉1		
117	5群以前				○						半裁調査		
118	7群以降	98 67			○								
120	6群以降	285 168			○			11			163より新しいヒスイ製白玉4		
121	6群以降	168 116			○						122・154より新しい		
122	6群以降	149 115			○			8			121より古い		
123	6群以降	119 106			○						144・145より新しい		
124	6群以降				○								
131	不明	150 105						165			ヒスイ製白玉3		
132	不明	54 48			○								
133	不明	84 48			○						123より古く、145より新しい		
136	不明	115 82			○			8	1		135より古い		
141	2b群以降	175 86			○								
144	6群以前				○						123より古く、145より新しい		
153	3群以前	190 166			○			28			156より古い碗形石製品ヒスイ製白玉21		
155	3群以前				○						160より古く、156より新しい		
156	3群以前				○						155・160より古く、153より新しい		
157	2c群以降				○			1	1				
161	4群以降				○						67より古く、173より新しい		
162	6群以降	133 72			○			1			ヒスイ製勾玉1		
163	6群以前				○						120より古い		
168	7群以前				—	—	— ○				半裁調査 242より古い		
172	不明	111 89			— ○	—	—	—			未調査		
173	4群以前				— ○						161より古い		
176	5群以降				○						半裁調査 117・118より新しく、177より古い		
177	7群以降				○						半裁調査 176・178より新しい		
178	5群以前				—	—	— ○				半裁調査 176より古い		
179	6群以降	120 56			— ○						半裁調査		
181	6群以降	135 81			— ○								
182	不明	88 68			— ○								
189	不明	39 27			— ○								
192	5群以降	156 117			— ○								
201	不明				— ○	—	—	—			未調査		
204	不明	131 64			— ○	—	—	—			未調査		
205	3群以降				— ○	—	—	—					
206	不明				— ○	—	—	—	6	37			
215	不明	154 94			— ○	—	—	—	—		未調査		
217	7群以降	169 86	女性	壯年	— ○	—	—	—			横臥屈葬		
219	不明	139 79	不明	壯年	— ○	—	—	—					
221	不明	128 99			— ○	—	—	—			未調査		
224	不明	290 194			— ○	—	—	—			未調査		
230	不明				— ○	—	—	—					
237	不明				— ○	—	—	—			半裁調査 240より古い		
238	不明				—	—	—	—	26		底面のみ残存		
241	不明				— ○	—	—	—			半裁調査		
242	7群以降	236 169			— ○	—	—	—	2		半裁調査 168より新しい		

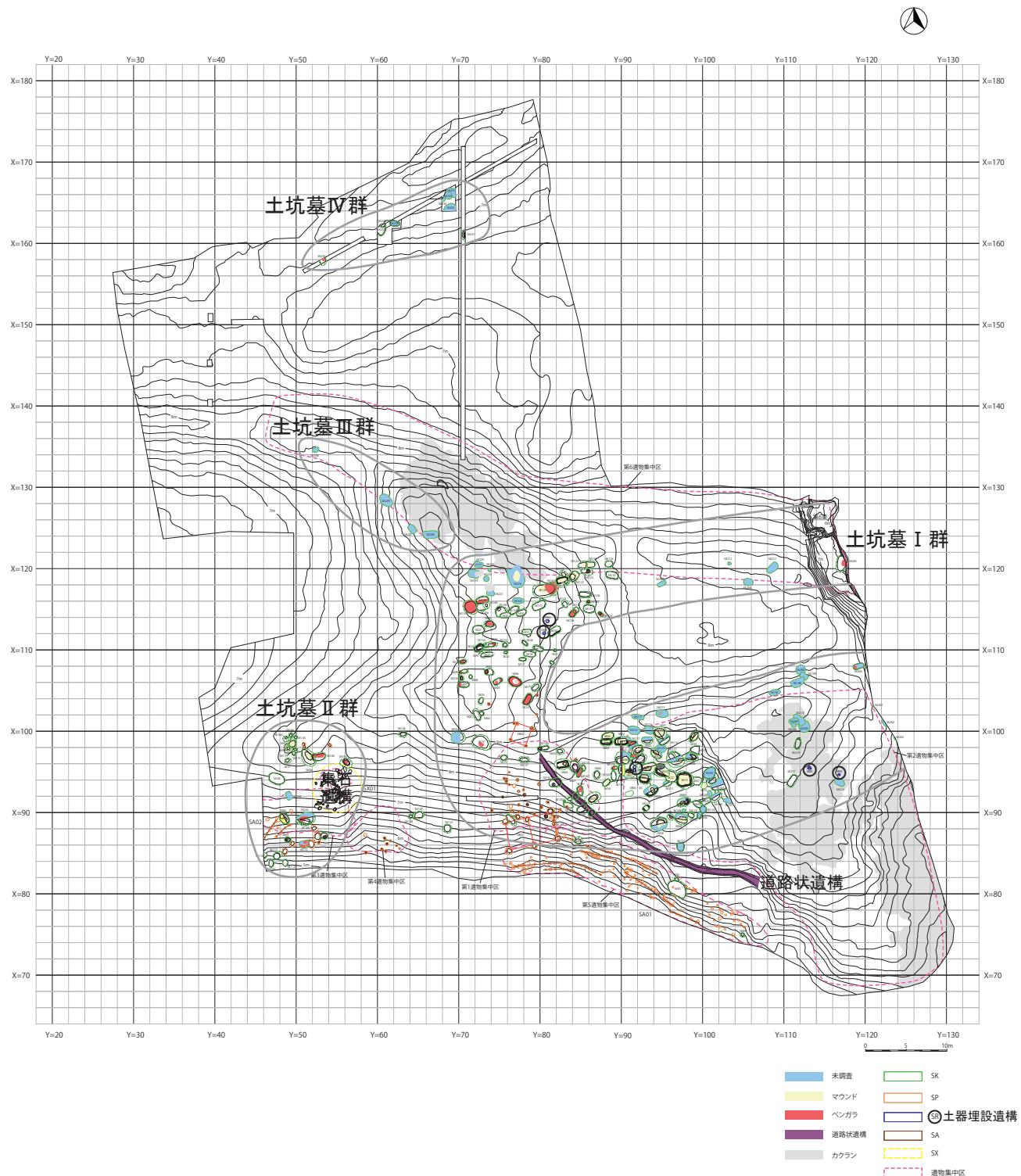


図 8 五所川原市五月女范遺跡の墓坑群

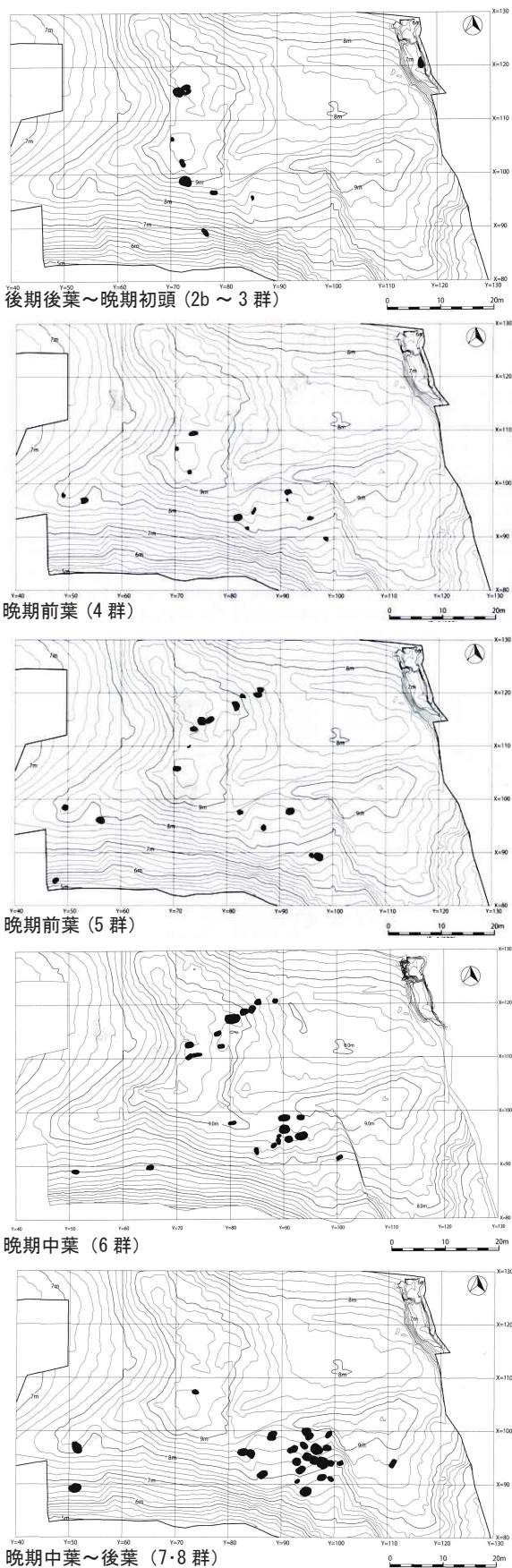


図9 五所川原市五月女范遺跡の墓域の変遷

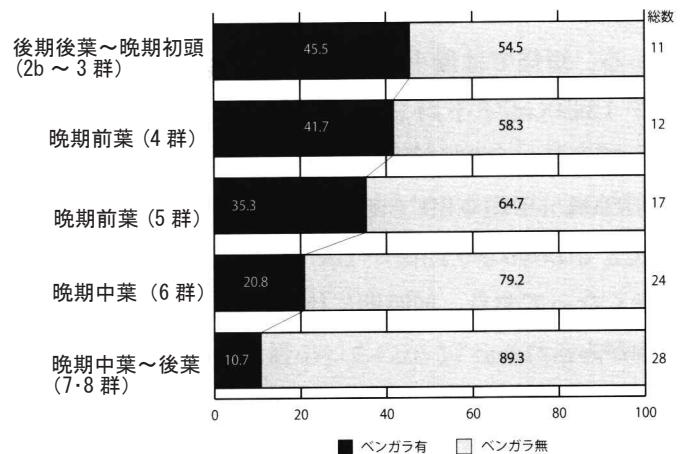


図10 五月女范遺跡における土坑墓のベンガラの有無

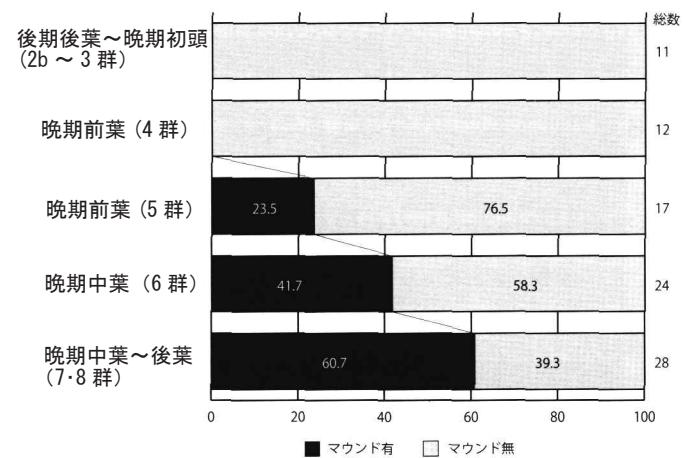


図11 五月女范遺跡における土坑墓のマウンドの有無

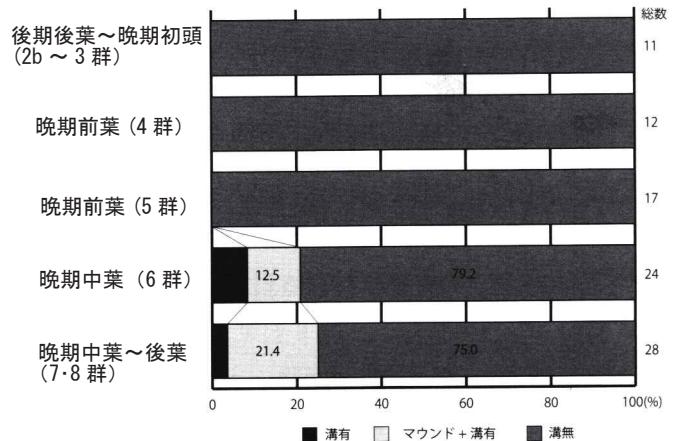


図12 五月女范遺跡における土坑墓底面の溝の有無

図9～12は全て報告書から転載

現われ、時代とともに増加、晩期中葉の大洞 C2 式／聖山 I 式期～8 群晩期後葉の大洞 A1 式／聖山 II 式期には半数以上の土坑墓がマウンドを伴うようになる（図 11）。

底面に溝をもつ土坑墓はマウンドをもつ土坑墓よりやや遅れ晩期中葉の大洞 C1 式期に現われ、晩期中葉の大洞 C2 式／聖山 I 式期～晩期後葉の大洞 A1 式／聖山 II 式期には全体の 4 分の 1 弱まで増加する（図 12）。

以上、五月女范遺跡の土坑墓は、ベンガラを伴う墓から、マウンドや土坑底面に溝を持つ墓へと変化したといえる。

次に副葬品について検討する。前述の通り、五月女范遺跡の土坑墓のなかには保存のため、遺構確認や半裁で調査が終わっているものが多く、それらについては副葬品について検討できない。ここでは他の遺構に大きく破壊されておらず、かつ底面まで完掘されている 62 基の土坑墓の副葬品について、時期毎の変遷と土坑墓の特徴の関連性について検討した。

副葬品は、装身具類に関して土製耳飾り・石製玉類・土製玉類に分け、時期がある程度特定できた 43 基を対象に変遷を検討した（図 13）。母数が少ないため安定しないが、石製玉類については後期後葉から晩期後葉まで、全体の 2～3 割程度の墓に副葬されていたと見られる。一方、土製玉類は晩期前葉の大洞 BC 式期、土製耳飾りは晩期中葉の大洞 C2 式／聖山 I 式期～晩期後葉の大洞 A1 式／聖山 II 式期に多く副葬された可能性がある。

次にベンガラ・マウンド・土坑墓底面の溝の有無と副葬品（石鏃・石製玉類・土製玉類・土製耳飾り）との間に相関が見られるか検討した（図 14～16）。その結果、マウンドを持つ墓がマウンドを持たない墓に比べ、石製玉類の副葬率がやや高いものの、それ以外は、特に墓坑の構造やベンガラの有無と副葬品の保有率には関連性が見られなかった。

これら 4 か所の墓域と関連する遺構として注目されるのが、幼児用の土器棺と思われる土器埋設遺構 6 基、墓道と考えられる道路上遺構と集石遺構（SX01）である（図 8）。土器埋設遺構（SR1～6）は、全て墓域 I で

検出されている。内訳は深鉢が正立した状態で埋められていたもの 4 基（SR1～4）、深鉢が倒立した状態で埋められていたもの 1 基（SR6）、正立した鉢の上に、深鉢を逆さに被せていたもの 1 基（SR5）である。時期は SR6 が晩期初頭の大洞 B1 式期、SR5 が晩期中葉の大洞 C2 式／聖山 I 式期、SR3 と SR4 は晩期中葉～後葉で、SR1 と SR2 は詳細な時期は不明である。これら墓域 I で検出された土器埋設遺構は墓域 I と同時期に営まれており、乳幼児用の土器棺墓と考えられる。

道路状遺構（SF01）は I 群の南側を等高線に沿う形で、北西-南東方向に延びている。土坑墓との新旧関係から晩期前葉の大洞 BC 式期以前に作られており、墓道の可能性がある。

集石遺構（SX01）は墓域 II と一部重なっている。集石遺構は、拳大から人頭大以上の円礫・角礫をはじめ、異形礫（有孔礫・軽石・球石・くびれ石・スタンプ形礫・凹凸礫・柱状礫・バナナ状礫・棒状礫・碗状礫）、鉱物（赤鉄鉱・水晶・メノウなど）の自然石とともに、磨石・敲石類や石皿・台石類、石棒、石刀、石冠などの石器が多量に集積しており、100 点もの土偶や土器の突起部・注口部なども意図的に集めた祭祀遺構である。構築時期は晩期中葉の大洞 C2 式／聖山 I 式期～晩期後葉の大洞 A1 式／聖山 II 式期である。

4. 考察

（1）墓域とマウンドについて

墓域は複数に分かれる場合が多いが、同一墓域に成人男女・小児・幼児が葬られており、世帯を単位とする家族が同じ墓域に埋葬された可能性が高い。また土坑墓群に接して小環状列石群（高砂貝塚）や集石遺構（五月女范遺跡）などの葬祭関連施設が伴う場合もみられる。

津軽海峡周辺域では粘土や砂利のマウンドを伴う土坑墓は晩期前葉には既に見られる。管見では渡島半島では、木古内町大平遺跡（北海道埋蔵文化財センター 2017）で検出されている上ノ国式古段階（関根 2012）の砂利のマウンドを伴う 3 基の土坑墓（P=241・243・246）が最も古い。一方、前述したように津軽半島の北部に位置する五月女范遺跡でも上ノ国式古段階に併行

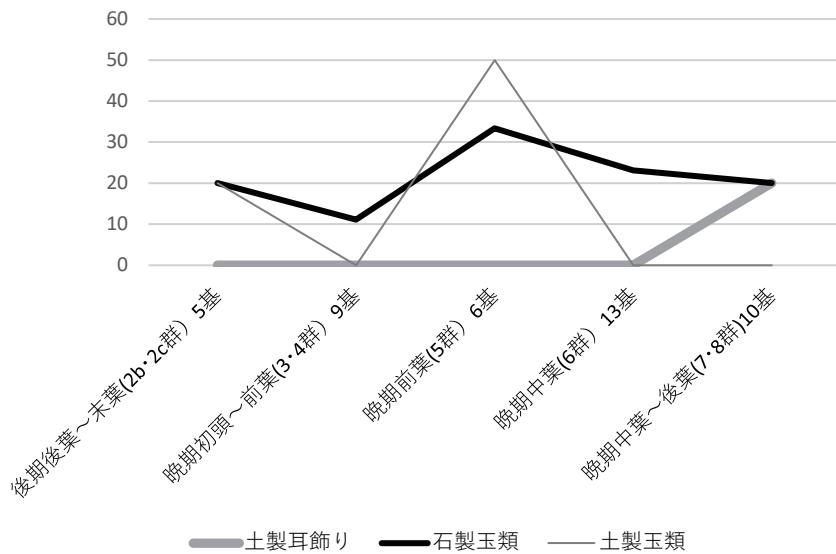


図 13 五月女范遺跡における装身具類の副葬率の変遷

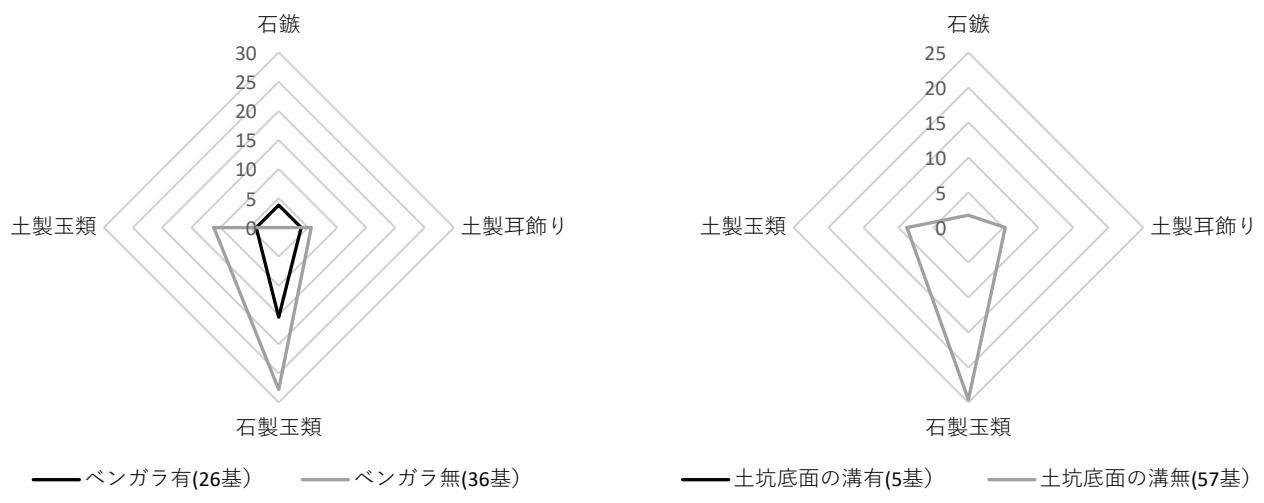


図 14 五月女范遺跡の土坑墓のベンガラの有無と副葬率 図 15 五月女范遺跡の土坑墓底面の溝の有無と副葬率

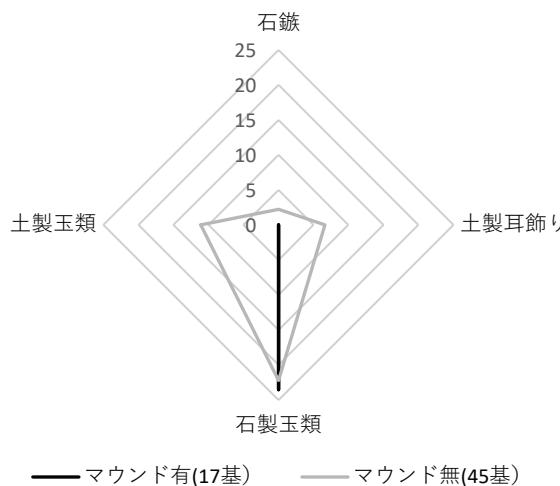


図 16 五月女范遺跡の土坑墓のマウンドの有無と副葬率

する大洞 BC 式期に粘土のマウンドを伴う土坑墓が出現し、次第に増加することが確認されている。

マウンドを伴う土坑墓の比率は、晩期中葉の大洞 C2 式古段階には黒松内低地帯より西側の高砂貝塚約 7%、社台 1 遺跡約 8% であるのに対して、渡島半島の大釜谷遺跡は約 21% と高い。また大洞 C2 式新段階／聖山 I 式、大洞 A1 式／聖山 II 式を含む五月女泡遺跡では約 53%、さらに聖山 II 式に後続する大平段階を含む札苅遺跡では約 67% と、時代が下るに連れ、マウンドを伴う比率が上昇している（図 17）。このうち砂利をマウンドに用いる土坑墓は北海道側に特徴的だが、五月女泡遺跡でも晩期中葉の大洞 C1 式期に 1 例だけ存在する。砂利をマウンドに用いた 162 号土坑墓の被葬者は、北海道出身であった可能性を指摘しておきたい。

以上のように、粘土や砂利を用いたマウンドを伴う土坑墓は、津軽海峡に面する地域で晩期前葉に始まり、晩期中葉に増加し、聖山式文化圏内に広がったと結論づけられよう。

（2）土坑墓の構造・ベンガラの散布と副葬品

マウンドや土坑底面の溝は時代が新しくなるにつれ増加しており、ベンガラが撒かれる土坑墓の比率は、遺跡間の差異が大きく、いずれも副葬品との関連性はみられない。副葬品が被葬者の年齢・性別・階層に関連するのであれば、マウンドや槨棺、ベンガラの有無は、そうした被葬者の生前の属性とは直接結びつかない可能性が高い。

北海道における縄文時代の墓の副葬品については、近年、藤原秀樹が詳細な検討を行っている（藤原 2022）。藤原は道内で人骨から被葬者の性別と年齢が判明した縄文時代から続縄文時代の単葬墓 47 遺跡 168 例と合葬墓 11 遺跡 13 例を集めて検討し、縄文時代の男性は多数の石鏃等の狩猟具、石器製作に関連する礫石器、石棒、漆塗櫛等や動物骨、女性はつまみ付ナイフ、台石・石皿等の調理に関する礫石器、両性は少数の石鏃、石斧等が副葬され、玉類等の装身具は、形状・材質・有無等により、性差・年齢段階差があるとした。

今回分析した聖山式土器文化圏の墓を特徴づける副葬品としては、漆塗りの装身具類や石製・土製の玉

類、複数のサメの歯をあしらった装身具類と、土坑内またはマウンド上に供献・副葬された土器、遺体のそばに置かれた籠胎漆器や多数の石鏃がある。このうち装身具類のほとんどは、死者が身につけていたと考えられるものが多いが、石製の玉のなかには、埋め戻した後で墓の上に撒いたと見られる例も少なくない。同様に、石鏃に関しても墓の上に撒いた可能性が高い事例が散見される。

石製玉類には多くの小型丸玉・白玉と少数の勾玉が見られ、それらを組み合わせた首飾りが普遍的に認められる。前述の 5 遺跡に加え、六ヶ所村上尾駿（1）遺跡 C 地区で調査された大洞 C1～C2 式期の土坑墓群 20 基（青森県教育委員会 1988）のデータを加え検討した結果、石製玉類の副葬率は北海道に比べ津軽・下北のほうが高いことが明らかとなった（図 18）。

玉類には主にヒスイと緑色凝灰岩が使われている。ヒスイが勾玉と丸玉・白玉の両方に使われているのに対して、緑色凝灰岩は丸玉・白玉に偏る。五月女泡遺跡や亀ヶ岡遺跡など津軽地方の縄文晩期の遺跡では、緑色凝灰岩製小型丸玉・白玉の製作が行われていたことを示す原石、未製品、玉砥石、穿孔用のドリルが発見されるのに対して、北海道では製品しか見つかず、緑色凝灰岩製玉類が製作されていた可能性は低い。石製玉類の石材組成は、北海道内では遺跡間の差異が大きいのに対して、津軽と下北は近似している（図 19）。

（3）厚葬の乳幼児・小児墓

聖山式土器文化圏内では、成人墓に比べても明らかに厚葬と呼べる小児墓が確認されている。高砂貝塚 G10 には 4 歳前後の小児が葬られていたが、土坑上にマウンド・配石・供献された粗製壺を伴い、土坑内にはベンガラが撒かれ、緑色凝灰岩製の玉 30 個が入った無文壺が副葬されていた（図 20-1）。また五月女泡遺跡第 6 号土坑（SK06）には乳幼児が葬られていたが、遺体を取り囲むように多量のベンガラが撒かれ、土製耳飾り 1 点と、ヒスイ製勾玉 1 ・ヒスイ製丸玉・白玉 18 点、オンファス輝石製丸玉・白玉 9 点、滑石製白玉 1 点、蛇紋岩製丸玉・白玉 12 点、ディサイト製垂飾品 1 点が副葬されていた（図 20-2）。このうち玉類はとも

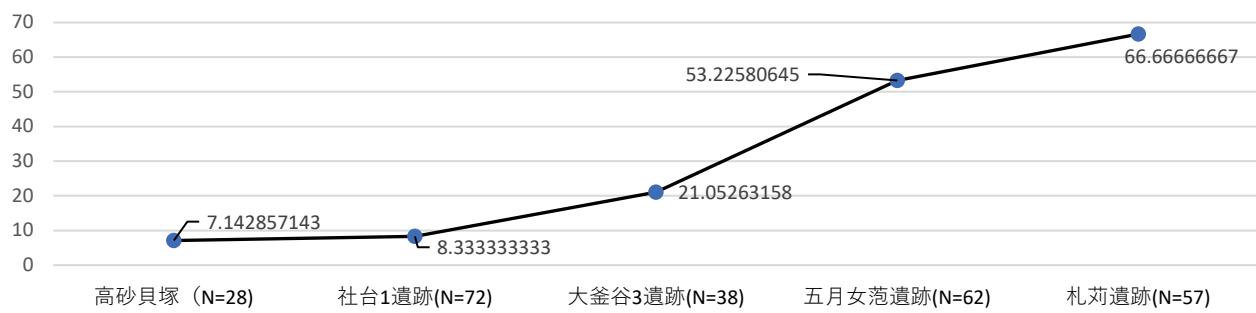


図 17 マウンドを伴う墓の比率

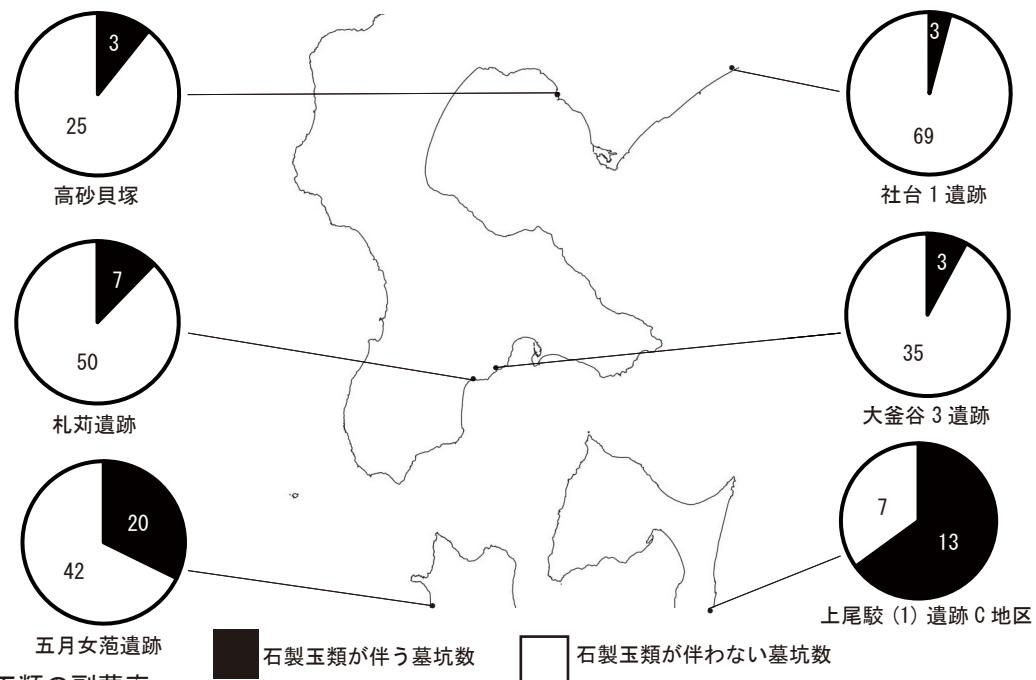


図 18 石製玉類の副葬率

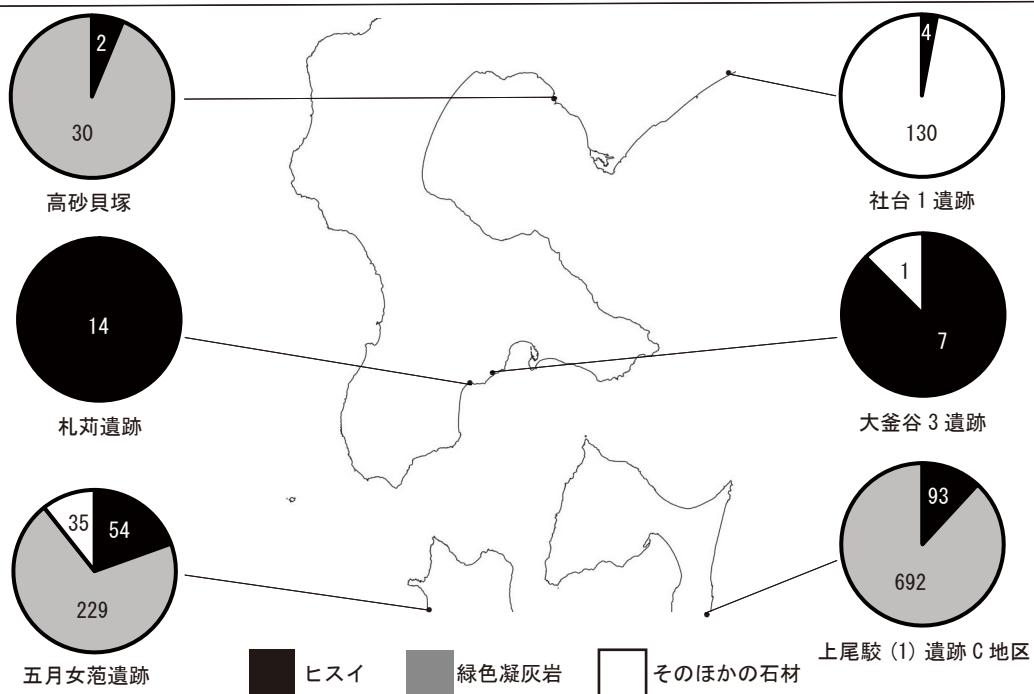
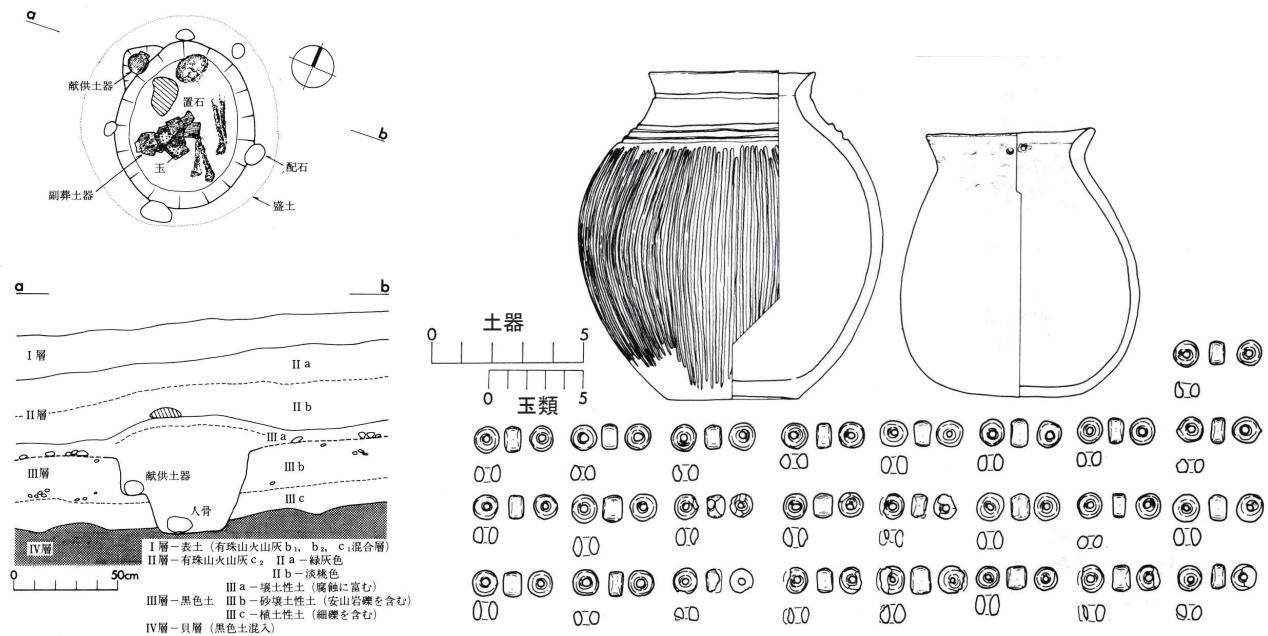
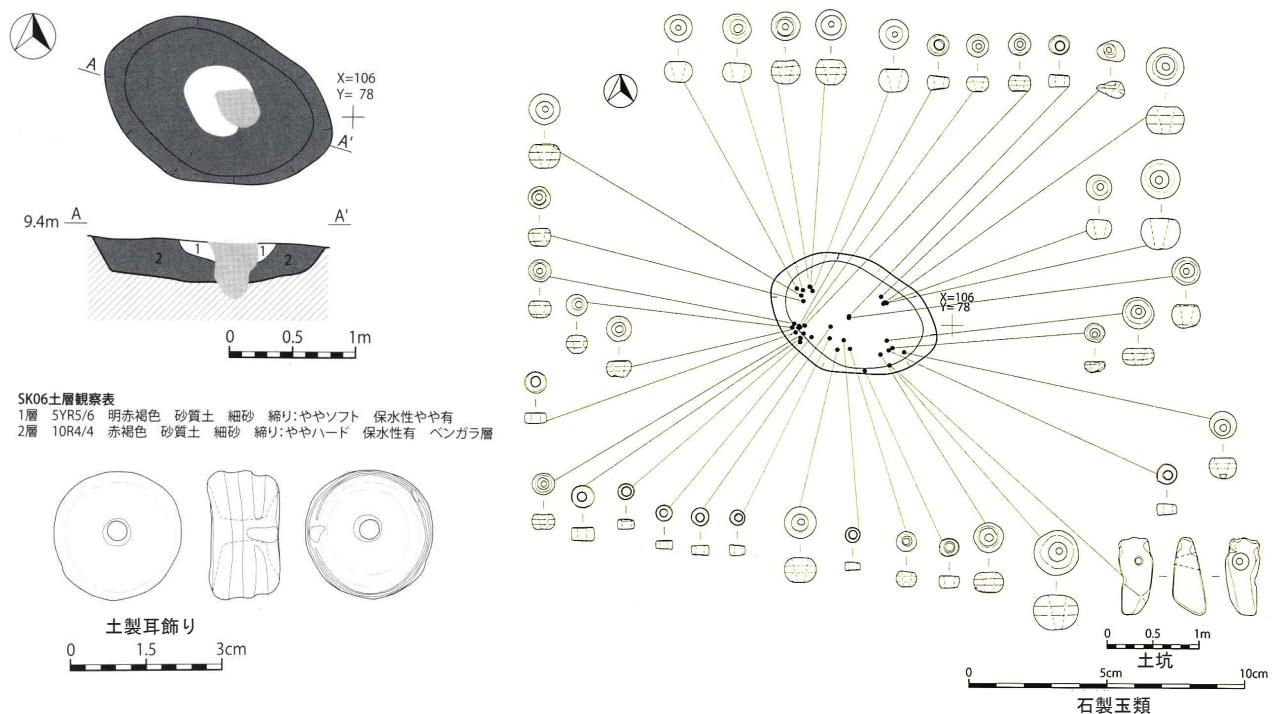


図 19 副葬された石製玉類の材質



1 洞爺湖町高砂貝塚 G10 (被葬者は4歳前後の小児)



2 五所川原市五月女范遺跡第6号土坑 (被葬者は乳幼児)

図 20 聖山式土器文化圏における厚葬の乳幼児・小児墓

かく、少なくとも直径約25mmの土製耳飾りを乳幼児が生前身につけていたとは考えられない。おそらくこれらの装身具類は、子どもの親の所持品で、亡き子どものために副葬したとみるべきであろう。同じことは緑色凝灰岩製の玉30個が入った無文壺が副葬されていた高砂貝塚G10の小児墓についてもいえるのではなかろうか。

こうした手厚く葬られた子どもは、生まれながらにして特別な地位や役割を担っていたと推定されよう。前述の通り、五月女泡遺跡では土坑墓に混じって同じ墓域内に乳幼児用の土器棺と思われる6基の埋設土器も検出されているが、いずれも副葬品は発見されていない。

なお、縄文時代の子どもの埋葬を検討した山田康弘によれば、大洞貝塚・里浜貝塚・田柄貝塚など東北地方の縄文晩期の遺跡でも、本稿で検討した聖山式土器文化圏と同じように、子どもが成人と同じ墓域に埋葬されているが、ベンガラの有無や埋葬姿勢・頭位方向などで成人と子どもが区別されていたという（山田1997）。

5. 結語

本稿では、聖山式土器文化圏の墓制について、墓域、墓の構造、供献・副葬品の3つの観点から検討した。

墓域は居住域から離れており、両者が隣接・重複することはほとんどない。また高砂貝塚の小環状列石群や五月女泡遺跡の集石遺構のように、墓域に隣接ないし一部重なる形で、葬送儀礼に関連する配石遺構が設けられる場合がある。成人と子どもが同じ墓域に埋葬されていることや、墓域が複数に分かれている場合、それぞれに成人男女と子どもが含まれるとみられることから、世帯を単位として営まれていた可能性が高いと推察した。成人と子どもが同じ墓域に埋葬されるのは亀ヶ岡文化圏内に広く認められる現象である。

聖山式土器文化圏の墓を特徴づけているのが、墓坑の上に構築された砂利や粘土を用いたマウンドである。マウンドには人頭大の石や供献された土器が伴うことも多い。粘土や砂利を用いたマウンドを伴う土坑墓は、津軽海峡に面する地域で晩期前葉に始まり、晩期中葉

に増加し、聖山式文化圏内に広がったことが明らかとなった。副葬品とマウンド・櫛棺・ベンガラの有無との間に特に相関性は見られないことから、マウンド・櫛棺・ベンガラは被葬者の年齢・性別・階層とは関係しない可能性が高いと判断した。

マウンドを伴う土坑墓そのものは縄文時代に広く認められるところであるが、一般には墓坑を掘削した際に出土した土や周囲の土砂を用いるため、発掘時に検出することが難しい場合が多い。聖山式土器文化圏の土坑墓のマウンドに墓坑近くの土砂ではなく、離れた場所から運んだ粘土や海岸の砂利が使われているのは、墓の多くが海岸砂丘や海岸段丘上に作られており、強い季節風の影響で土砂が吹き飛ばされ、埋葬した骸が露出するのを防ぐために始まり、普及していったのではないだろうか。

聖山式土器文化圏の墓を特徴づけている副葬品に石製・土製の玉類、土製耳飾り、漆塗りの装身具、複数のサメの歯を用いた装身具など多種多様なアクセサリー類がある。これらアクセサリーの副葬に関しては、どの遺跡でも同じ墓域内で極端な差が認められる。本稿ではそのなかで特に多くの装身具を伴う乳幼児墓に注目した。乳児が身につけたとは思われない耳飾りなどが含まれていることから、それらは、子どもの親の所持品で、亡き子どものために副葬したと考えた。

聖山式土器文化圏には、豊富な装身具を持つ者と持たぬ者とがあり、持つ者はそれを子どもに継承したが、墓域や墓の構造には著しい階層差が見られない社会だったといえよう。

引用・参考文献

- 青野友哉 1999『本州系文化の消長 大洞～恵山式土器の墓』『日本考古学協会1999年度釧路大会シンポジウム 海峡と北の考古学 資料集』II 43-76
- 青森県教育委員会 1988『上尾駒(1) 遺跡C地区』青森県埋蔵文化財調査報告書 113
- 青森県立郷土館 1984『亀ヶ岡石器時代遺跡』青森県立郷土館調査報告 17
- 青森県埋蔵文化財調査センター 1994『朝日山遺跡 3 第1分冊 朝日山(1) 遺跡 遺物編』青森県埋蔵文

- 化財調査報告書 156
秋田県教育庁文化課 1978 『湯出野遺跡発掘調査概報』
秋田県文化財調査報告書 53
秋田市教育委員会 1987 『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
阿部朝衛 1998「副葬品としての石鏃—北海道木古内町札苅遺跡の石鏃を例として—」『北方の考古学』263-276 野村崇先生還暦記念論集刊行会
飯島義雄 1988「聖山式土器について」『亀ヶ岡式土器の編年について』第3回縄文文化検討会シンポジウム資料集
宇鉄遺跡調査会 1996 『宇鉄遺跡』
上屋眞一・木村英明 2016『国指定史跡カリンバ遺跡と柏木B遺跡—縄文時代後期 石棒集団から赤い漆塗り帶集団へ—』同成社
岡村道雄・吉岡恭平 1981「土器型式設定と聖山遺跡の土器群」『信濃』33-4 28-41
金子昭彦 2004「東北地方北部縄文時代晚期における副葬品の意味（予察）—階層化社会をよみとることはできるか」『縄文時代』15 95-116 縄文時代文化研究会
金子昭彦 2005a「東北地方北部縄文時代晚期における墓と副葬品」『紀要』X XIV 33-56 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
金子昭彦 2005b「階層化社会と亀ヶ岡文化の墓」『日本考古学』19 1-28
木古内町教育委員会 1974『札苅遺跡—国道拡幅に伴う緊急発掘調査報告—』
木古内町教育委員会 2003『大釜谷3遺跡』
久保泰 1977「北海道松前町上川遺跡における縄文晚期墳墓の調査」『考古学ジャーナル』133 14-15
五所川原市教育委員会 2017『五月女泡遺跡』五所川原市埋蔵文化財調査報告書 34
鈴木正博 2019「津軽海峡墓景色—「亀ヶ岡文化」の北漸と再葬墓研究の真骨頂—」『利根川』41 67-86
佐川正敏 1981「続「聖山遺跡」I—土器の諸問題—」『北海道考古学』17 55-67
静内町教育委員会 1984『御殿山遺跡とその周辺における考古学的調査』
- 瀬川拓郎 1980「「環状土籬」の成立と解体」『考古学研究』27 (3) 55-73
瀬川拓郎 2007「縄文—続縄文移行期の葬制変化」『縄文時代の考古学 9 死と弔い—葬制』208-218 同成社
関根達人 2012「北海道晚期縄文土器編年の再構築」『北海道考古学』48 33-52
関根達人 2015「亀ヶ岡文化の実像」『東北の古代史』1 177-203 吉川弘文館
関根達人 2021「北海道松前町上川遺跡発掘調査報告」『北海道考古学』57 85-104
関根達人・上條信彦編 2012『下北半島における亀ヶ岡文化の研究—む 市不備無遺跡発掘調査報告書—』弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター
芹沢長介編 1979『岬下聖山遺跡』東北大学文学部考古学研究会
つがる市教育委員会 2019『史跡亀ヶ岡石器時代遺跡総括報告書』
中嶋友文 2007「朝日山(1) 遺跡の墓群と埋葬頭位」『縄文時代の考古学 9 死と弔い—葬制』123-137 同成社
中村大 1999「墓制から読む縄文社会の階層化」『縄文学の世界』48-60 朝日新聞社
中村大 2000「土器の出土状態からみた土壙墓の認定について—縄文時代の北日本を中心として—」『國學院大學考古学資料館紀要』16 34-61
中村大 2007「亀ヶ岡文化の葬制」『縄文時代の考古学 9 死と弔い—葬制』81-92 同成社
野村崇 1985『北海道縄文時代終末期の研究』みやま書房
林謙作 1993「石狩低地帯南部の環状周堤墓」潮見浩先生退官記念論文集『考古論集』243-282
福田正宏 1998「北海道と東北地方北部における聖山式以降の土器編年」『シンポジウム聖山以後の渡島半島資料集』
福田正宏 2000「北部亀ヶ岡式土器としての聖山式土器」『古代』108 129-158 早稲田大学考古学会
福田正宏 2003「北海道における亀ヶ岡式土器と在地土器の系統」『海と考古学』5 19-52

- 藤沼邦彦・関根達人 2008 「亀ヶ岡式土器（亀ヶ岡式系土器群）」『総覧縄文土器』 682-693 アムプロモーション
- 藤本英夫 1963 『GOTENYAMA Plates』 静内町教育委員会
- 藤原秀樹 2006 「北海道における縄文時代後期・晚期の墓制とヒスイ玉」『玉文化』 3 23-90 玉文化研究会
- 藤原秀樹 2017 「北海道の周堤墓から見た縄文時代の社会」『理論考古学の実践』 II 実践編 263-295 同成社
- 藤原秀樹 2019a 「北海道における縄文・続縄文時代の子供の埋葬」『北海道考古学』 55 1-20
- 藤原秀樹 2019b 「周堤墓と葬送儀礼」『季刊考古学』 148 74-78 雄山閣
- 藤原秀樹 2022 「北海道における縄文・続縄文時代の副葬品と被葬者」『北海道考古学』 58 28-44
- 藤原秀樹 2023 「縄文の埋葬行為」『季刊考古学』 部冊 42（北海道考古学の最前線—今世紀における進展—） 55-58 雄山閣
- 北海道開拓記念館 1976 『札苅—北海道上磯郡木古内町における縄文時代晚期土坑墓の調査—』
- 北海道埋蔵文化財センター 1981 『社台 1 遺跡・虎杖浜 4 遺跡・千歳 4 遺跡・富岸遺跡』 北埋調報 1
- 北海道埋蔵文化財センター 1983 『ママチ遺跡』 北埋調報 9
- 北海道埋蔵文化財センター 1984 『湯の里遺跡群』 北埋調報 18
- 北海道埋蔵文化財センター 1986 『美沢川流域の遺跡群』 IX 北埋調報 24
- 北海道埋蔵文化財センター 1986 『木古内町札苅遺跡』 北埋調報 34
- 北海道埋蔵文化財センター 1987 『ママチ遺跡III』 北埋調報 36
- 北海道埋蔵文化財センター 2017 『木古内町 大平遺跡 (4)』 北調報 329
- 三橋公平ほか 1987 『高砂貝塚』 札幌医科大学解剖学第二講座
- 南北海道考古学情報交換会第 20 回記念シンポジウム 実行委員会 1999 『北日本における縄文時代の墓制資料集』
- 山田康弘 1997 「縄文時代の子供の埋葬」『日本考古学』 4 1-39
- 吉崎昌一編 1979 『聖山—北海道亀田郡七飯町における縄文時代遺跡の調査—』
- 【関根達人、連絡先：弘前大学人文社会科学部・弘前市文京町 1】